

2012年度 巡検報告書 - 諏訪地域-

目次

2012年度報告書作成にあたり 長谷川直子・水野勲
諏訪の文化的背景がもつコンパクトシティ化可能性
(渡邊葉)
諏訪地域の食品産業 (岩月あかり)
諏訪地域における酒造出稼ぎの実態と、現在の就業状況について (大野榛香)
昆虫食からみる日本の伝統 (片桐梢)
諏訪市における「藤森」「宮坂」姓の分布 (坪川睦)
諏訪地域の商店街の変化とまちづくりについて (石上和)
『まちづくり』の取り組み～諏訪における地域調査を通して～ (奥本友紀)
諏訪の景観とまちづくり (松本江利奈)

諏訪地域における観光政策 (相曾瑞希)
諏訪地域における人々の空間認識と地域内外の結びつき (若山沙織)
企業誘致の限界と地域経済における一考察:「知恵を出す人々」～諏訪の第一精密工業団地と御田町を事例に～ (鎌田亜希)
上諏訪温泉の現状と課題 (榎由里絵)
霧ヶ峰の魅力を活かすエコツーリズム (棗沙紀)
諏訪圏における観光スポットの連携 (秦朝弓)
地域文化と住民
～諏訪大社の御柱祭と住民～ (佐伯英恵, 中嶋悠紀, 小川杏子, 趙燿虹)

2012年度報告書作成にあたり

長谷川 直子・水野 勲

実はお茶の水女子大学地理学コースでは、3年前に諏訪で地域調査を行った。この時の調査が不十分であったことから、前回の引率教員である水野と長谷川ともに残念な思いがあった。今回再び同じ2名で引率することになったことから、同じ地域で再度調査をすることにした。

まず今回は、市役所との連絡を強化した。幸運なことに、諏訪市役所総務課の宮坂課長が非常に丁寧に対応してくださり、こちらのテーマに沿った訪問先で、こちらが知らなかったところを一人一人の学生に対して丁寧に教えていただいた。このことで、事前準備ははかどり、現地での調査がより充実したものになったと思う。ここに感謝の意を表したい。

今回の調査を行い、改めて、諏訪という地域が地理学的に非常に面白い、希少な地域であるという認識を持った。諏訪湖と御神渡しという自然現象に関連した諏訪信仰、御柱祭。背後の霧ヶ峰連峰との連続性、その伏流水を利用した精密機械工業の一大集積地と酒蔵の集積。フォッサマグナ上に位置する断層、温泉、宿場町。冷涼な気候を利用した高冷地栽培と寒天産業、昆虫食文化の継承など、すべてが連関してこの地域を唯一無二のものにしている。学生は個別のテーマを持って調査を行ったが、このようなバックグラウンドのもとに個別の事象が位置

づけられているという意識を持って、テーマに向き合ってもらいたいと思う。

今回の報告書は、2部構成としている。第1部は地域概要にあたる地誌の記述であり、第2部が学生の個別テーマに基づいた報告書である。第1部の地誌については、諏訪市史などの資料が膨大だったことと、今年度学生数が多かったことから、事前の授業で全体を網羅することができず、個別の調査テーマに関連する部分の概要を記述するにとどまってしまったことが残念である。これについては次回以降の課題としたい。第2部については個別テーマについての報告書であるが、似たテーマごとにグループを作り同一行動をしていたグループも多くあることから、グループで1つの報告内容になっていたり、また一部内容に重複があるところもある。なるべく重複を避けるように調整はしたが、内容上省けなかったところもあり、結果読みづらい部分もあるかと思うが、ご容赦願いたい。

最後に、今回の調査を行うにあたり、現地でお世話になったすべての方に、改めて感謝申し上げたい。

諏訪の文化的背景が持つコンパクトシティ化の可能性

渡邊 葉

諏訪地域は盆地の中心に諏訪湖を抱え、その湖岸は3つの市町に接している。湖岸通りの内周と、国道20号・長野自動車道による外周、そして霧ヶ峰高原、八ヶ岳連峰とに囲まれた市街地という形状は、一種のモデルのような印象さえ受けた。

盆地という隔離されたともいえる地形にある都市の、自己完結性は大変興味深い。諏訪地域の成り立ちを調べているうちに、諏訪ひいては信州の風土文化性とコンパクトシティという都市のあり方は、相性がよいのではないかと考えるようになった。

そのため、本稿では現地でのフィールドワークおよび文献資料で得た情報を、コンパクトシティという文脈で読み解くことを目的とした。

先行研究は、日本の都市にコンパクトシティとしての評価を下すにあたって、以下を指標として利用することを提案している。(武田・柴田・有馬2011「コンパクトシティ指標の開発と都市間ランキング」)

1. 居住地のまとまり
2. 明確な境界
3. 高い居住密度
4. 高い就業密度
5. 拠点の求心力
6. 公共交通の充実
7. 歩いて暮らせる生活圈
8. 文化歴史の継承
9. 質の高い公共空間



図1 平成22年国勢調査人口集中地区境界図

(総務省統計局 HP より引用)

まず、諏訪の空間的特性について述べる。前述の通り、諏訪市は諏訪湖に面し、霧ヶ峰高原、八ヶ岳連峰に囲まれた盆地である。これらが、境界の役割を果たしており、市街地が拡散的に広がることもなく、比較的コンパクトにまとまっており、国土交通省によって人口集中地区に指定されている。

また、市内の15歳以上就労人口25954人の内、60.3%にあたる16424人が市内で就業している。特に注目すべきなのが第二次産業人口の多さである。就業人口に対する割合34.9%は、全国平均25.2%と比較して高いといえる。(平成22年度国勢調査より)

諏訪の産業史を概観すると、近代以降盛んだった製糸業に次いで、戦時工場疎開を受け入れた結果、戦後も現地に残った企業を中心として製造業が盛んとなったことがわかる。このような地域産業の変遷の結果、諏訪地域には住工商が混在した都市型工業地域が形成されることとなった。この都市内部に立地する工業地域は、居住域と工業地域が隣接していることによって仕事場が近く、大規模な交通渋滞が発生しにくいという利点の反面、煙や騒音、出荷のトラックなどが生活の妨げになっている。

また、コンパクトシティとしての検討からは脱線するが、このような市内という限られた地域内に隣接する企業・工場同士であるものの、それぞれの技術の独自性や、販路などの独立性は極めて高く、「隣の会社が何を作っているか知らない」のが現状であるようだ。そのため、諏訪市では工業振興協議会において市内60社を調査。また工業アドバイザーを設置し、助成金などの具体的なアドバイスや企業同士のマッチングを提供している。加えて、展示会および工業メッセ、二年ごとに発行する工業ガイドによって、企業間での情報交換の場を作っており、諏訪市を含めた周辺6市区町村では民間レベルの連携は以前よりも進歩している。

現在でも、「諏訪」は精密機械工業の一大地域としてブランドイメージを保っており、固定資産税が高額になるものの、参入を希望する企業もあり、商工課では用地情報も提供している。

また小中学生を対象とした、地域密着型ものづくり講座を開催し、若者がもの作りに親しむ機会を提供するこ

とで、地元での就職を増やし、商工業の面からの人口維持にも努めている。（諏訪市役所商工課聞き取り調査より）

続いて、諏訪地域内のアクセス性を考えると、市内の駅は上諏訪駅のみであり、少なくとも諏訪市民が市内を鉄道移動することはほとんどなく、鉄道は市外とのアクセス手段である。市内での公共交通機関としては市が提供する循環バスがある。市民の主な足となっているのは自家用車で、長野県の世帯あたりの自動車普及台数は1.58台、これは全国で10位、東京の世帯あたり0.48台の3倍以上である。（平成22年度国勢調査より）

自家用車に次いで、通勤通学手段として多いのは「徒歩だけ」「自転車」であるのは、職場と住居の近接性を示しており、興味深い。しかし、このような車社会の問題点として、渋滞のおこりやすさと、交通弱者の存在が挙げられる。国道の渋滞は自家用車の数が最大の要因である。また、他地域から来るトラックも上諏訪へ荷物を運ぶ場合は国道20号線を利用することになり、渋滞に拍車をかけている。国道20号線は諏訪市内で2カ所踏切が設置されており、これも渋滞の一因であるが、渋滞解決に向けては踏切の立体交差化以上に国道バイパスの建設が望まれている。

国道20号バイパスは国道よりも山側に建設が予定されており、完成することで通過車両の誘導による渋滞の解消や、市街地内の交通量の減少、また災害時の交通の確保が期待される。

平成18年8月には豪雨により、国道20号の諏訪市内外3カ所では最大37時間通行止めとなった。諏訪市市街部の扇状地地形は水害に弱く、この災害で諏訪は陸の孤島と化した。バイパスに緊急時の代替輸送路としての性格を持たせ、都市外縁部外側の環境を整え、地区の機能による階層区分に対応した交通を適切に確保することは、コンパクトシティの実現のための交通管理としても重要である。（諏訪市役所国道バイパス対策室聞き取り調査より）

一方、都市空間内の交通の整備も課題である。都市空間内の道路は歩行者の利用に適切な安全性を備えていることが必要である。だが、諏訪市内においては交通手段として自動車が一般的であることにより、歩行者にとって利用しやすい交通空間であるとは言い難い。加えて、徒歩圏内に大型の生鮮食料品店がないというフードデザートの問題が挙げられる。駅前のマルミツデパートの倒産により、自家用車という交通手段を持たない高齢者ら交通弱者は郊外商業地域へ買い物に行くことを余儀なく

されており、歩いて暮らせる生活圏の実現が望まれる。

文化歴史の継承の点を考えてみよう。信州と呼ばれる市域は、国全体が険しい地勢により他地域から隔離されている。また、その内部も縦横に走る山脈により、いくつにも区切られ、谷や盆地を中心とする小地域の集合体である。この地形的特徴により古くから、それぞれが高い生産力をもった生活圏として機能してきた。

一例を挙げると、江戸時代においては大量輸送の手段は舟運が一般的であった。だが、信州地域は川の数こそ多いものの、それぞれが激流で舟による輸送は不可能だった。代替手段として、流れが緩やかになる中流まで人馬による輸送が行われたが、これは一度あたりの輸送量が少なく、舟運と比較するとコストが高かった。輸送上の障害を抱えた信州の産業は、一貫して軽薄短小にして単価の高い品物、すなわち商品作物や工芸品などを扱ってきた。古くは、弥生時代の黒曜石製品の全国流通が挙げられる。

当初は限られた資源の活用による特産品が主流であったが、技術の向上で原材料を他所から仕入れても、競争に足だけの技術を確立した。信州地域は、江戸時代からの内陸型高付加価値産業の地域であるといえる。（社団法人農山漁村文化協会：人づくり風土記 聞き書きによる知恵シリーズ(20)ふるさとの人と知恵 長野,1888)

加えて、盆地という風土により、それぞれの生活圏の独立性が高いことに起因してか、人々もまた独立独歩・勤勉努力の精神を強く意識しており、巡検中の聞き取りにおいて、現地の人々が「諏訪人氣質」という言葉で、自分たちを形容することが度々あった。

これまで、諏訪を空間特性、就業状況、交通、歴史の面からとらえてきた。諏訪は盆地という性質から、平野の都市圏のようなスプロール化が起りにくく、人が住める空間が限定されてきた。また、その立地により外部との交易が困難だったことから、内陸型高付加価値産業を指向し、今日でもその伝統は引き継がれ、住工商の混在が特徴である都市型工業地域を形成しており、諏訪市では就業人口のうち60%もが、居住と同一市内で就業している。

先行研究では、コンパクトシティ度評価が高い日本の都市は「海や山によって拡大が制限」され「比較的面積が小さい」場合が多い。諏訪の場合、諏訪湖岸を共有する下諏訪町、岡谷市もそれぞれ人口集中地域となっている。それぞれの市町が独立性と特色をもった街となり、それをつなぐことで、諏訪湖を中心とした（あるいは中心となる巨大な核のない）円環状の地域のモデルを実現

することができるのではないだろうか。また、諏訪地域内での循環は、同様に盆地を中心として形成された地域によって構成される長野県において、国道や高速道路で

他の地域ともつながり、より大きな多核型シティモデルにもなりうるかも知れない。

諏訪地域の食品産業

岩月 あかり

I はじめに

現在、地場産業はどの地域においても衰退傾向にあり、活気がないというイメージを持つかもしれない。筆者もそう思っていた。しかしそれはマスメディアなどを通してのイメージであり、実際に見たり聞いたりして確認したことはなかった。そこで今回は地場産業について直接見聞きたいと思い、諏訪地方の伝統食品産業である味噌産業と寒天産業を選んだ。内容は、伝統食品産業の現状と、今後の展望とする。

II 本調査における研究方法

松木寒天産業、丸井伊藤商店、丸高蔵、茅野市商工会議所からの聞き取り調査。諏訪市図書館で文献や新聞からの調査。

III 調査結果と考察

1. 訪問先の概要

まず、味噌産業について述べる。初めに、茅野市の丸井伊藤商店を訪問した。丸井伊藤商店は、工場のほかに、市内に直売所をいくつか持っている。出荷は県内が多いという。海外の輸出については、積極的に販売活動を行ってはいないが、海外にいる日本企業の人たちには、使ってもらっているようである。次に、諏訪市の丸高蔵を訪問した。丸高蔵も味噌の製造だけでなく、店舗を構えている。店舗として使っている建物など、3つの建物が登録有形文化財に指定されている。非常に歴史を感じさせる建物である。丸高蔵も国内の出荷がほとんどである。なぜなら、海外に輸出するとなると、英語への翻訳など、非常に手間がかかるからである。

寒天産業については、松木寒天産業を訪問した。松木寒天産業は、天然寒天と工業寒天の両方を販売している会社である。寒天には、天然寒天と工業寒天がある。天然寒天は伝統的な製法で、工業寒天はすべて機械の中で製造

できる。製造の仕方は全く別である。

2. 味噌業界のこれまでと現状

丸井伊藤商店の方に、日本全国および諏訪地域の味噌業界について教えていただいた。味噌業界は、まず大手と言われる会社は何社が存在する。大手と言われる会社は、主にスーパーに卸している。実はそれだけで日本で食べる味噌の量は賄えるほどだという。大手以外もスーパーに卸すという手もあるが、値段はスーパーが決めるため、それに対応できる所でないと生き残っていけない。要するに、スーパーに卸すには、大量生産、大量販売で、作れば作るほど安くできる大手が有利である。しかし、味噌は嗜好食品であるため、中小企業の味噌工場も成り立っている。中小が生き残っていくには、大手の関係ないところで販売することが重要になってくる。そのため、諏訪地域の味噌の会社は、スーパーに卸す人、旅館に卸す人、直営店で販売する人などさまざまであるらしい。会社同士がぶつかり合っているという感じはしないという。丸高蔵の方からも、同じような回答が得られた。味噌業界は、小さな会社も価格競争に飲み込まれているので、価格競争に飲み込まれない知恵が必要である。その例として、新たな味噌商品を開発していくという手がある。丸高蔵では、煎り酒という調味料や、味噌煎餅といったようなお菓子を販売している。また今後、西洋料理など、海外の料理の中でさらに味噌が使われるようになるかもしれないと予想していた。

現在、丸井伊藤商店は工場見学も積極的に行っている。工場見学の際に見ることができる内容量4トンの樽があり、それで25万人分のも味噌汁を作ることができるという。また、味噌の販売も工場の隣で行っている。工場見学に来たお客さんに味噌を買ってもらうことができる。丸高蔵は、積極的には工場見学を行ってはいないようだが、地元の小学生が見学に来たり、学校給食に当社の味噌を使ったりするなど、地域に根付いている。また現在、

味噌料理として、諏訪地方ではみそ天井というものを推している。地元の食材を使ったどんぶりで、平成17年から諏訪のご当地丼として、販売している。また、富士見駅、茅野駅、上諏訪駅、下諏訪駅、岡谷駅、辰野駅、諏訪地方観光連盟が共催して、味噌蔵・酒蔵めぐりスタンプラリーというものを開催していた。

3. 寒天業界のこれまでと現状

諏訪地方は、天然寒天である角寒天の生産量で全国一である。しかし、そのような諏訪地方も、昔に比べれば業者数も減っている。また、天然角寒天だけでなく、工業寒天である粉末状の寒天が主流になってきている。

天然角寒天は、すべての工程が手作業で行われている。流し箱(もろぶた)に煮終わった寒天液を入れ、固めて切っていく作業をする作業員の映像を見せてもらったが、非常に洗練した技術が必要で、まさに職人技であった。また、寒天の凍結と溶解は屋外で行われるため、その間雨が降る(どやという)と、ふたやシートをかぶせなければならない。今は、天気予報などを使って、雨を予想しているが、昔は天気予報がなかったため、雲や干場の周りの自然環境で判断して、雨をよけていたという。

諏訪地方は冬は気温が非常にながるため、寒天に適した気候として、繁栄してきた。しかし、海に面しているわけではなく、原料であるテングサをわざわざ運んで来なければならない。それならばいっそ、他の海に面した地域で寒天製造を行えばいいのではと思っていたが、この内陸地方にまで持ってくるほど、諏訪地方は寒天製造に適しているという。ただし製造できるのは、冬の2ヶ月間に限られている。

その一方で、工業寒天である粉末状の寒天は、工場で作るため、天然寒天のように気候の不向きなど気にせず、どこでも作ることができる。よって、工業粉末寒天が開発された後、天然角寒天は減っていった。しかし現在、寒天の主要生産地である茅野市では、さまざまな取り組みをしている。テレビ放送によって寒天ブームがきた2005年より、放送された日を記念して、「寒天の日」と名付け、地域住民に寒天料理をふるまっている。その様子は、毎年新聞にも掲載されている。

また、寒天は食品だけではなく、工業用にも使われている。海外の商品はどのような印象を持っているかを尋ねたところ、工業用の用途ならいいのではという回答が得られた。食品としては、質の面であまり良くないらしい。

4. 自然災害など、外部からの影響

味噌産業も寒天産業も、やはり東日本大震災の影響はあったようである。丸井伊藤商店の方によると、味噌に関しては、震災によって福島産の米が使えなくなったため、米の価格が値上がりした。また直接的な影響ではないが、工場見学に訪れるお客さんが増えたという。その理由は、震災によって被害を受けた福島には旅行に行けないため、東北地方でない当地域に来たというものだった。しかし、時が経つにつれ、今度は復興ということで東日本に行く人が増えたため、だんだん見学者は減少した。丸高蔵の方は、日本企業全体に見られた現象だが、海外の輸出には影響があったと述べていた。やはり震災直後は、放射性物質などに海外も非常に敏感であった。アメリカに会社がある味噌工場はほとんど売りに上げに影響がなかったという話からも、その影響が分かる。

寒天に関しては、寒天の原料は海藻であることから、放射性物質を心配したお客さんから、問い合わせがあったという。しかし、実際の所、寒天の原料は日本のものは少なく、海外比率が高い。例えば、チリ、モロッコ、南アフリカから輸入している。ちなみに、一般的に日本人は何かと国産にこだわり、海外の原料だというと質が落ちるというイメージを持っている。しかし、海外の原料だからといって、質が悪いということはないそうである。また、寒天の原料の海藻には、震災の影響にかかわらず、もともとヨウ素が成分として入っている。そういった理由から微量のヨウ素は心配ない。しかし、その点を誤解している人も多くいると思われる。よって、消費者のイメージのこともあり、入札で東北地方ではない海藻を買うなど消費者の心配を軽減するように取り組んだという。

また、東日本大震災のような自然災害や地球温暖化などの自然現象による影響だけでなく、寒天産業は、近年マスメディアに取り上げられたことによって大きな影響を受けていた。前述したように、寒天は2005年にブームとなった。それによって、ネット注文が激増し、ネットがパンクしてしまった。マスメディアの威力は非常に大きいものだと感じたという。売上は非常に伸びたが、その反面、そこには伝統産業を荒らすきっかけとなる悪い面も持ち合わせていた。具体的には、その当時、寒天の質は問われなかった、「寒天であればいい」といったような消費者が寒天を買うため、形だけ寒天のような商品が増えた、しかし良い面もあった。良い面としては、寒天はそれまで原料素材としてしか見られなかったが、ダイエットに効き健康な食品であるという新しいインパクトを社会に与えることができたことと、料理をする人だけの寒天から、ほとんどすべての人のものとなったことだった。

5. グローバル化、情報化による変化と現状

両社ともにグローバル化に伴って、昔とはずいぶん変化しているという。その変化として、まず食生活が挙げられる。昔は、味噌汁といえば毎日必ず飲むもので、和食には欠かせなかった。しかし現在は、パン食を始めとする洋食が普及したため、味噌汁を必ず飲む習慣はなくなった。よって、昔と同じやり方で、ものを売ってはいけなくと考えている。

次に、情報化が挙げられる。情報化社会に伴い、インターネットを使うことはあたりまえの世界になりつつある。多くの企業でネット販売が見られるようになり、携帯電話限定のクーポンなども出てきたりしている。そのような流れの中で地域の地場産業も、ネット販売を行うようになった。しかし、ネット販売を主流にしていくのは、難しい面もある。なぜなら、ネットを主流にすると、広告料金などのお金が発生するなど、さまざまな面で手をつけなければいけないからである。中小の企業にとって、ネット販売を主流にして、販売していくのは、まだまだ難題がある。よって、ネット販売を主流にしてはいないのでネットによって爆発的に売れることは現在ない。だが、ある程度広い地域から注文があるなど、多少の効果はある。

6. 伝統食品産業を通して「食」を考える

松木寒天産業の方が強調していたのは、現在の「食」を見直す必要があるということである。昔、冷蔵庫がない時代に、生のものをどうやったら日持ちさせることができるのか、先人が知恵を絞って、天然角寒天を作りだした。現在、粉末寒天の需要が高く、天然角寒天より粉末寒天を使おうという傾向があるが、良さを考えると、どちらも同等だということだった。市場のニーズを勝ち取ったものが当然ながら栄えるが、それは長期的に見て、本当に幸せなことなのか、という疑問が生じている。市場主義のいきすぎではないかという考えも生まれる。短期的に利益追求に走りすぎると、本当に必要な本物を軽視してしまう。本物を作るには職人が必要で、彼らは本物に対する思いがとても強い。見た目は一緒だが、職人が毎日手をかけて製造したものと、工場の中で温度などを機械的に調節され、管理されて出来上がったものを大きな違いと見るかどうかは人それぞれだが、現在市場規模が小さくなってきている天然角寒天の良さを何とかして伝えたいとも強調された。

食は、もちろん栄養をとるためのものであるが、人々に幸せを与えるものでもある。筆者は両企業で、味噌蔵を見

学させてもらったが、どちらも大きな蔵で、蔵がある部屋全体に味噌の匂いが充満していた。丸井伊藤商店の社長によると、その場所に麹菌が住み着いているので、その環境でないと、その味噌は作れないそうである。「味噌の味」の観点から見れば、現在さまざまな味噌が流通している中でその1つ1つ微妙な味の違いがあるということになる。私たちは、単なる健康食品として、味噌の栄養成分だけを摂取すればいいという考え方を改める必要があるかもしれない。賞味期限や消費期限を過剰なまでに気にしたり、栄養が足りないからと数値的に考えて、サプリメントをとるなどといった行為は、本当に幸せな食文化へと結びついているのかという疑問を投げかけられている。もちろん、時代の流れというものはあり、松木寒天産業も、世の中の風潮により角寒天を以前より小さく切って出荷しているという面もある。だが、角寒天を始めとする職人が作っているようなものを、価格だけで見て、高いから買えないとして切り捨ててしまうのではなく、そのものの価値を見て、判断してほしいという。

私たちは、私たち自身の現在そしてこれからの「食生活」について一度立ち止まって考えていかなければならない。

IV おわりに

地場産業という、正直後継者不足に悩まされ、衰退の一途を辿っているというイメージがあった。しかし、実際現地に赴いてみると、そのイメージはがらりと変わった。訪問したどの企業の方々からも、自社製品に対して誇りを持っていることが伝わってきた。また、どうやったら良くなるかなど、日々考えているということも分かった。私たちが地場産業に対して日頃マスメディアなどから得られる情報は、ほんの一部に過ぎないということを、身をもって実感した。

特に印象に残ったのは、寒天ブームの話である。企業は、維持していくため、また企業の存在意義として、利益追求という役割が与えられている。それならば、寒天ブームでネット注文が多すぎてパンクしたのはうれしい悲鳴であり、「あのブームは良かった」というお話をされると思っていた。しかし、伝統産業を荒らすきっかけという一面も持っており、よいことばかりではなかったと言われ驚いた。食品産業は、時に予知できない自然災害、それだけではなく人が作り出した時代の波によって、予想していたよりもはるかに大きな影響を受けてしまうということを知った。

また、東日本大震災の放射性物質の影響をニュースで

知って、それならば東北地方の食品はやめようとか、安い外国製品の輸入品は健康に悪そうだからやめようといった短絡的思考ではなく、これから私たちの食生活を幸せなものにするには、どのような食品を選んでいくべきかなど、もっと深く考えて、多くの商品から選択していくという視点が必要だと実感した。

この先の高齢化社会、ダイエット志向や健康志向などで、健康食品は確実に需要があるといえる。だがその一方で、少子化がますます進んでいき、人口減少は回避できないものとなっている。そのため、企業として売り上げの面を強化する必要があるのならば海外へ視野を広げることが課題だと思っていた。しかし、お話を伺って、見学させてもらくと、伝統食品産業としての立ち位置などから、一概にはグローバル志向がいいとは言えないの

ではないかと思った。自社製品をどうしたいのか、社会にどのような影響を与える立場でありたいのか、それを考えるのは非常に重要なことだと、お話を伺って感じた。

謝辞

この実習で、普段の生活では関わることのない、食品産業に携わる方々の生の声を聞かせてもらうことができ、非常に勉強になりました。工場見学も忘れられない思い出です。本当に感謝しています。ありがとうございました。

文献

全国味噌工業協同組合連合会 2011『みそ文化史』

諏訪地域における酒造出稼ぎの実態と現在の就業状況について

大野 榛香

I はじめに

諏訪地域では寒冷な気候と富士ヶ峰からのきれいな水という条件から、多くの造り酒屋が集まっている。一方で諏訪市の周辺にあたる富士見町や原村では高地農業が盛んで、冬の農閑期を利用した諏訪市への酒造出稼ぎが近世から行われている。今回の諏訪大巡検で、諏訪地域の酒造における出稼ぎの現状や、現在の就業形態の調査を行った。

II 方法

本調査では、上諏訪市に位置する5つの酒造に絞って、主にインタビュー調査を中心に行った。実施は7月24日～28日の現地での実習の際に行い、事前にインタビュー内容を郵送もしくはメールにて送り、その内容に基づいて話を伺った。

調査を依頼した酒造は、以下の通りである。（調査順）

- A 舞姫酒造株式会社 土橋氏
- B 麗人酒造株式会社 小松氏
- C 宮坂醸造株式会社酒 青木氏・宮坂氏
- D 伊東酒造株式会社 保科氏
- E ぬのや本金酒造株式会社 宮坂氏

III 調査結果と考察

1. 諏訪地域の酒造について

諏訪地域は、霧ヶ峰のきれいな水と適度な寒さ、冬期に乾燥するという、日本酒作りに適した気候に恵まれ、その上酒に適した米（美山錦）が良質である。そのため諏訪には9社10工場に酒造が今でも栄えている。そのうち5社は上諏訪市元町の、ほんの200mほどの間に密集しており、昔高島城の城下町だったこの地域は人の通りも多く、酒屋が繁盛していたことがわかる。

上諏訪で酒造りが始まった頃、まだ技術不足だったため、広島から杜氏が来て、富士見・原村からの蔵人に技術を教えていたとのこと。その広島の杜氏から学んだ蔵人が諏訪杜氏となった。

冬は農業ができないため、農家の男性は諏訪市など都市の方へ出稼ぎに行くのが当たり前の文化だった。出稼ぎは酒造だけでなく、寒天（天屋と呼ばれる）や東京・横浜で生産している海苔、近年では精密機械の企業へ働きに行っている。資料によると、日本のさまざまな地域で「酒造出稼ぎ」は行われているが、中でも諏訪での酒造出稼ぎは、近隣農村の中でも「上層農家」、つまり稼ぎの多い百姓の家が出稼ぎに行く、というのが一般的だったようである。

今回の調査では、上諏訪の5つの酒造にインタビューを行うことで、諏訪における酒造出稼ぎの現状把握を行う。その上で、どのような人びとがどのような考えを持って出稼ぎへ行ったのか、出稼ぎを受け入れたのかを、働き側と受け入れ側との両面から考察する。

2. 従業員の雇用形態

まずは主に醸造に関わる従業員の雇用形態を、酒造ごとにまとめた。(表はインタビュー調査順)

インタビューの内容によると、どの蔵も生産のピーク時である昭和50年代から、蔵人は半分またはそれ以下に減り、杜氏も「社員杜氏」という傾向にあるという。社員杜氏とは、杜氏が冬期にのみ酒造りをしにくるのではなく、社員化させ、通年お酒の管理をしたり、酒造りを行わない時期には瓶詰め作業をしたりすることである。現在は伊東酒造と麗人酒造がこの形態を取っている。

麗人酒造は、杜氏を常勤にし、社員化させたことで2つのプラス要素が生じたという。まず、杜氏を常勤にしたのは、以前は仕込んだ清酒が売れて商品が不足すると、夏でも仕込むことがあり、そのときに夏でも杜氏が必要とされていた、という背景がある。そして、杜氏を常勤にしたことで、通年を通して日本酒の管理が細やかにできるというメリットが生じた。さらに結果として、夏期は冬期ほど忙しくないため、杜氏に時間ができ、夏期にビール造りを始めることができたとのこと。社員化することでの様々なメリットは、清酒の生産量が減ったことでプラス要因に転じている。

また、「社員醸造」と言い、一般雇用の社員に醸造を教え、蔵人を新たに雇わない、いわゆる社員を蔵人化させるという形態もあった。本金酒造がこの手段をとっている。この手段は、富士見・原村出身の蔵人が、冬でも農作業ができるようになったことと、蔵人の高齢化が進み、さらに酒造でも機械化が進んだことで、技術のない一般社員でも醸造作業ができるようになったという背景がある。杜氏や蔵人の勘で醸造していた作業が数値化できるようになり、指導もより簡単になったのである。本金酒造でも、ショップ店員や身内に醸造を引き継いで社員醸造化を行っている。

3. 酒造出稼ぎに来る(来た)杜氏・蔵人の生活や様子

酒造りに直接関わる杜氏・蔵人は、富士見町、原村から出稼ぎに来ている傾向がある。酒造りのピーク時である昭和57年頃は、杜氏も蔵人も冬期のみ泊まり込みで働

表1 諏訪の酒造の従業員の雇用形態

	従業員数	雇用形態	通勤方法	出身地
舞姫酒造	杜氏1名・蔵人3名	全員季節雇用	杜氏のみ冬期住み込み、蔵人は通勤	富士見・原村
麗人酒造	杜氏1名・蔵人3名 + ビール醸造1名(蔵人のうち1名は夏期にビール醸造も)	杜氏は常勤、蔵人は季節雇用	全員通勤	杜氏は下諏訪・蔵人は原村
宮坂醸造	杜氏2名・蔵人23名(2蔵あわせて)	全員季節雇用	全員通勤	主に富士見・原村
伊東酒造	杜氏1名【社員杜氏】・蔵人2名 + 社員1名も酒造りをする	杜氏と社員は常勤、蔵人2人は季節雇用	全員通勤	富士見・原村
本金酒造	顧問(元杜氏) + 従業員・パートも酒造りをする【社員醸造】	顧問は年間雇用だが常にいるわけではない	全員通勤	富士見 おっこと町乙事

き、冬期以外は実家で農業を営む、というのが普通であったようである。しかし清酒の需要が減り、生産量を減らしている現在、富士見町・原村から上諏訪への交通網が発達したこともあって、住み込みではなく車通勤という手段で冬期のみ通う傾向になっている。インタビューによると、近年個人のプライバシーが重視されるようになり、住み込みという集団生活はいかがなものかという考え方や、10月末から3月という住み込みの期間中家族と離れてしまうのもかわいそうだ、という経営者の心配りも伺えた。現在はほとんどの杜氏・蔵人は、農業の盛んな富士見町や原村から、冬期のみ季節雇用(出稼ぎ)で、車などで通勤している。

当時の集団生活での、杜氏と蔵人との上下関係はとても厳しかったという。その中でも「途中で辞めず、長年働いた蔵人の中から、次の杜氏が選ばれる」という、出稼ぎとはいえ非常に厳しい世界だった。

またインタビューの中で、出稼ぎに来ている農家は、冬期以外は地元で高冷地栽培のセロリや花きの生産を行っている人がほとんどだった。富士見・原村はセロリや花きなどの農業が盛んで、かなり裕福であるとのことである。このことから、最近では「上層農家」が出稼ぎに来る慣習があるということがわかる。

4. 出稼ぎ（季節雇用）に対する、酒造側と働き手側の考え

出稼ぎに来る農家の男性のほとんどは、杜氏・蔵人からの紹介が主である。農家のつながりで信頼できる若者を紹介できるので、酒造側は後継者には困っていないとのこと。清酒の需要が減り、ピーク時よりも従業員が半分またはそれ以下になった近年、新たに蔵人を増やそうとする動きがないことも理由の一つであった。一方、最近では原村辺りでも農家の後継者問題に悩んでいるとのこと。そのため、「酒造りの後継者を農家へ頼む（求人する）のはいかなるものか」という酒造側の考えもあり、現在蔵で働いており、地元農家に顔の広い蔵人や杜氏に直接紹介してもらおうのが、確実に信頼でき、周りの農家への不信感も減るだろう、という話も伺えた。「出稼ぎは当たり前」の文化の残る一方で、後継者問題も抱える現代の農家に対して、酒造側が気を配っていることも分かる。

では逆に、高収入を得ている上層農家が、わざわざ冬期に酒屋に出稼ぎにくる理由は古い慣習だけなのだろうか。江戸時代から富士見・原村の地域では出稼ぎが行われていたため、「高卒の若者は出稼ぎに出るのが当然だ」という風習も見られることは、話を聞いてわかった。時には出稼ぎに行っていない男性は、実際に「周りから変な目で見られる」こともあったようである。一方で宮坂酒造から一つ面白い話を聞いた。話によると、原村などの農家はセロリといった高地栽培が主で、朝の3時から出荷作業をするなど非常に重労働なため、女性が嫁に来づらい。そのため、酒造に冬期のみ働きにくることで、農村から市街地に出ることができるため、女性との接触の機会を期待している人もいたそうである。富士見・原村の農家の男性は、決してお金を稼ぐ目的のみで出稼ぎに来ている訳ではないようである。

IV おわりに

現在の上諏訪5蔵では、富士見・原村にて高冷地栽培を行う、いわゆる上層農家が、冬期のみ季節雇用で、地元から車通勤で働いていることが分かった。清酒の生産量がピークだった頃に比べると蔵人の人数は減り、交通網の発達により、住み込みから通勤へと変わった。そこには近年の時代の流れを汲み取った経営者の働き側への配慮が見られた。生産量の減少だけでなく、機械化が進んだこ

とで、経営の縮小をはかるため、杜氏や蔵人の杜氏を社員化させたり、社員を蔵人として醸造作業をさせたりする、「社員杜氏」「社員醸造」といった、出稼ぎを雇わない手段をとる傾向にある。社員化することでの様々なメリットは、清酒の生産量の減少と機械化の導入でプラス要因に転じている。

また出稼ぎに来る者らは、農家としてかなりの収入を得ているが、出稼ぎを昔からの古い風習として受け入れており、また農家では期待できない「嫁探し」にも期待を抱いているようである。

筆者は現在も続く酒造出稼ぎという文化は、数十年後にはなくなるのではないかと危惧している。筆者自身、出稼ぎは過去の文化だと思い、最近でも一般事項として行われているという事実には驚いた。農家自体の後継者問題に加え、清酒の生産量の低迷、醸造作業の機械化を考えると、最近見られる「社員醸造」が一般化し、出稼ぎが必要なくなると考えられる。特に生産量が大手・中堅と比べて少ない会社の場合、人件費を減らすのが経営を保つ一つの手段になり得るため、わざわざ富士見・原村から通ってもらうよりも、上諏訪周辺の人を通年で雇った方が、よりメリットが多いだろう。さらに、富士見・原村の高冷地栽培が非常に高収入の為、「文化・風習」という理由以外で出稼ぎに行く理由がなくなってしまう可能性も大きい。出稼ぎという文化に固執せず、生産性を高める為の手段をとる日は、そう遠くないかもしれない。

文献

小林恒夫(2008):「肥前杜氏」史研修総括 - 杜氏調査のまとめ
Coastal Bioenvironment Vol.10 1-10

長谷川尚志(2003): 秋田県山内村における酒造出稼ぎ者の労働実態 秋大地理 50, 7-12,

矢野晋吾: 諏訪杜氏の特質と「出稼ぎ」労働力輩出の背景-
消えゆく杜氏制度を支えたもの

<http://www.sakebunka.co.jp/archive/culture/007.htm>

(2012年6月20日閲覧)

昆虫食からみる日本の伝統

片桐 梢

I はじめに

伝統食品は、現代の中で存続をしようとする中でそのあり方そのものが変容し、伝統から離れていくのではないかという予想の元で、調査を行った。

この調査では、昆虫食文化が実際に根付いていた地域を訪れ、現在商品として販売している人たちから商品としての昆虫食についての話を聞き取った。

また、郷土資料の中から昆虫食に関する資料調査を行った。

II 方法

事前の調査で、昆虫食の中でも更に題材を絞り込み、ハチノコについて調査することにした。

2012年7月24日から28日にかけて行われた地域調査の中で、実際に諏訪地方に訪れて調査を行った。

関連した製品を生産している企業への聞き取り、土産物屋や昆虫食に対して地元の人間がどう関わっているのか観察を行った。また、地元の図書館で郷土資料の中から昆虫食に関する記述を探した。

III 調査結果

1. 昆虫食とは

人の口に入る昆虫には、薬用昆虫と食用昆虫の二種類があるが、今回は昆虫食文化ということで、食用昆虫について論じていきたい。

昆虫食についてふれた文献の多くは、長野県を代表するいかもの食いであるという前提で話を進めている(今村.1986)。しかし昆虫食が長野県に固有のものであるとする文献の多くは、客観的な裏付けが欠けている。江戸時代もしくは大正期の食物・風土に関する資料をひもとした文献は、昆虫食が長野県に限った文化ではないと述べている(松浦.2002)。

昆虫が食卓に上がるのは、二通りの理由が考えられる。他にタンパク源がなかったから仕方がなく口にする場合と、他の食べ物と比べても遜色ないくらいに美味であった場合である。前者は、長野県民がよく口にする昆虫食の理由である。しかし、それは飽食の時代と呼ばれる現在まで昆虫食文化が残っている理由にはならない。

昆虫食は現代人の賞味に足る物なのである。

2. ハチノコについて

ハチノコについての理解を深めるため、ハチノコの採取方法に附いて説明しよう。ハチノコの採取方法については『スズメバチを食べる』(松浦.2002)、『本多勝一はこんなものを食べてきた』(堀田あきお.2004)、『しなの食物誌』(田中.1890)、『信濃の食文化 ナウマン象狩りから長寿県まで』(今村.1986)、『こむぎいろの天使 すかれ追い』(後藤.1999)などで言及されている。

これらの記述の中で、共通している部分をまとめたものが以下である。

まず、木の枝や竿の先端に魚や動物の肉の切れ端を吊るしておく。

すると、クロスズメバチの働き蜂が生肉の匂いに釣られてやってくる。蜂が肉団子をつくって巣に運ぶ際に、方向と戻ってくるまでの時間を観察し、巣の方角と距離に目星を付ける。

しばらく見守り、蜂の警戒心が薄れて来た頃に、真綿など目印になるようなものを肉団子に混ぜて持たせる。近年ではビニール袋の切れ端を使うこともある。

後は持たせた目印をたよりに、巣に帰る蜂を走って追いかけるだけである。

クロスズメバチの巣を発見したら、目印を立てておき日が傾いて蜂の活動が穏やかになるのを見計らって巣を掘りおこす。巣の入り口から煙が出るものを差し込んで入り口を埋め、中にいる蜂の動きを止める。そして巣を掘り起こし、袋などに入れてもって帰る。

ハチノコ取りが行われる季節は夏の終わりから秋と決まっている。これは秋になると巣内に女王棚というものが形成されるからである。蜂の巣は中でいくつかの層に別れているのだが、女王棚は中でも女王蜂となるべき蜂ばかりを育てている層のことを指す。女王棚に入っているハチノコは働き蜂のものと比べて質が良い。

3. 商品としてのハチノコ

販売されているハチノコは、瓶詰めや缶詰めにされており長期保存が可能なのがほとんどだ。多少高価ではあるが駅周辺の土産物屋では大抵ハチノコの甘露煮が置

いてあり、通信販売でも購入が可能になっている。

今回、こうしたハチノコに関連した商品を生産している企業でお話を伺ってきた。一つ目の企業は「有限会社山田養蜂場」（以下、山田養蜂場）である。

この企業では、ハチミツやそれに関連する商品の他にハチノコやハチノコを使ったサプリメントの生産販売を行っている。広く蜂から生産される商品を扱っているのので、その一貫としてハチノコも扱っている。

ミツバチ（セイヨウミツバチ）のハチノコと、珍味として知られているハチノコとは全く別の種類の物である。地中に巣を作ることから、地元ではジバチと呼ばれているクロスズメバチのハチノコが食用であるのに対して、ミツバチのハチノコは漢方薬としての役割が大きい。

ミツバチのハチノコは耳鳴りや滋養強壮に効果があり、身を清めるという役割も持っていた。乾燥させて粉末にして食されるもので、伝統的なやり方では天日にさらして乾かしたあと粉末にされる。現在は、フリーズドライ製法がとられている。ハチノコサプリメントとして売られているものもこのミツバチのハチノコで、健康食品として取り扱われている。

またセイヨウミツバチは昔から飼育されていて技術が確立されているため、ハチノコの生産も容易である。

山田養蜂場では、セイヨウミツバチだけでなくクロスズメバチのハチノコも販売している。こちらは養蜂場で飼育しているものではない。珍味としてのハチノコを愛好する仲間たちでとりにいったものを、販売の方に回しているのだという。そのため供給は安定しておらず手に入ったときだけ売る。

ハチノコを季節に影響されず安定して供給している企業には、原田商店がある。花九曜煮という商品名でハチノコの甘露煮を販売している。原田商店では、主にカリンに関する商品を取り扱っていて、昆虫食に関連する商品としては、イナゴとハチノコ（クロスズメバチ）を取り扱っている。駅前の土産物屋や県外で手に入るハチノコの缶詰めは原田商店の製品であることが多い。原材料となる虫は中国からの輸入である。中国でも養殖はしていないのだが、国土の広さと人件費の安さという面から日本国内で確保するよりも安定した量が確保できるという。

また、県内と県外の販売量に差はあるか尋ねた所、山田養蜂場で販売しているセイヨウミツバチのハチノコを使ったサプリメントは、地域による変化は見られない。だがクロスズメバチのハチノコは県内のしかも個人での消費がほとんどである。たとえ他の地域で食べるように

なっても供給が追いつかないという。原田商店ではクロスズメバチのハチノコをのみの生産だが、県内よりも県外の土産物屋などに出荷することが多いという話を聞くことができた。

4. 生物としてのハチノコ

山田養蜂場での聞き取りの結果は、以下の通りである。

クロスズメバチはミツバチと違って、いまだ養殖に成功していない。そしてミツバチは越冬して一つの巣が数年に渡って活動することができるが、クロスズメバチの巣は一年限りである。

交尾をした女王蜂は冬眠をして越冬したあと巣を作り始める。女王蜂を、人の任意の場所に押し込んで巣を作らせる試みもされたが、安定した生産につながるほどの効果はあげていない。気に入った環境でないと、巣を大きくしない傾向にある。

好みそうなえさ場をつくって呼び込んだり、巣をとってきたりして行う飼育には成功しており、家のまわりでクロスズメバチを飼っている家も数多くある。また人工交尾や交尾後の女王蜂の人工越冬に関しては、数十年前から成功し、数グループが今でも取り組んでいる。

クロスズメバチは年によって生息している場所が大きく変化する。気候や日当たりなどが関係するといわれているが、因果関係はいまだ明らかにされていないため、どこに巣を作っているのか予測することは困難だ。ある年に姿が見えなくなったり数多く見かけたりしたからといって、全体として減ったのか増えたのか判断するのは容易ではない。中にはクロスズメバチの数は昔と違って増えているくらいだと主張する人もいたが、その数や生息域は減少してきているというのが一般的な見方だ。前述の山田養蜂場の社長を始めとしてクロスズメバチを愛好する仲間達で保護活動も行っている。諏訪地方では、飼育していたクロスズメバチ数群を山に返す人が多く、この地方での保護に一役買っている。

数が減少してしまった理由として、一番大きいのが周囲の環境の変化である。生態系の変化や、温暖化、農薬の散布などの影響で、クロスズメバチは生息域を移さざるを得なくなってきた。

「昔はこの裏山にもたくさんのジバチがいた」と、山田養蜂場の社長は語る。地面に巣をつくるという性質上、彼らが生活するためには堅すぎず柔らかすぎない、むき出しの地面が必要になる。都市域が拡大すれば、必然的にクロスズメバチの生息域は減少する。

何よりも深刻なのは、農薬の影響だという。長野県内

の多くの場所で果樹や野菜が栽培されているが、今や農業と農薬は切っても切れない関係にある。選択毒といい特定の生物には強い毒性を発揮する類のもので、これに蜂も含まれている。クロスズメバチはもちろんだが、ミツバチにも大きな打撃を与えるため養蜂場としては看過できない問題である。200〜300m以内で農薬が使用されると30近くある箱の半分がやられてしまう（巣がダメになってしまう）という。これは農家の責任というより、虫がついたものを格外品とする消費者の感覚に起因している。虫すら食べないものが本当に良いものなのか、その感覚は本当に正常なものなのか、疑問を投げかけてくる問題である。

もう一つ、クロスズメバチ減少の原因としてあげられるのが、昭和50年代頃から起こったハチノコブームである。バブル景気で世の中がわいた時、必要なもの以外にどれだけお金をかけられるのかが、裕福さのパロメーターであるかのような気運が高まった。そういった流れの中でハチノコに目が向き、需要が大きく高まったのだという。クロスズメバチは長野県以外にも生息している。むしろ食べる人がいない分長野県内よりも数が多いこともあるので、そうした場所でもハチノコが取られるようになった。

ハチノコを食べる文化がない場所の人間は当然ながら、ハチノコを取る際のマナーというのを知らない。巣を取った時に一部を残して元のとおり埋めておいてやる。持ち帰って巣が大きくなるまで育てた蜂の一部を再び自然に返してやるといったことが、その例である。こうした配慮があるから毎年のように人間に巣を取られても、長野県内のクロスズメバチはきちんと次世代へ命を繋いできた。また、クロスズメバチになじみがない人間は根底に、蜂という生き物に対する恐怖がある。スズメバチと言えば人を死に至らしめることもある猛毒で知られるが、クロスズメバチにももちろん毒針がある。蜂に対する恐怖が生態系への配慮を欠かせてしまい、根こそぎ巣を持っていかれたクロスズメバチは数を減らすことになったのである。

V 考察

土産物として残っている昆虫食と残っていない昆虫食があるが、この違いはやはり生活様式の変化、あるいはそれがもたらす環境の変化が大きいと考える。人々の生活に添っていたゴトウムシやカイコは、生活が変化してしまうと人々から縁遠いものとなり食べられなくなった一方で、人々の生活と寄り添っておらず、人が能動的に

なる必要があった昆虫食は、生活の変化の影響をあまり多く受けず現在までのこっているのではないだろうか。イナゴは生活に根付いた昆虫食だが、稲作は養蚕や薪炭燃料と違ってまだ日本の農村部で息づいている。これが他の昆虫食との大きな差だろう。

観光パンフレットで大きく紙面を割いて宣伝されていることはなかったが、ハチノコはほとんどの土産物屋においてあり、諏訪の土産物として受け入れられていることは分かった。今は一部の地域にしか残っていないハチノコを食べる文化だが、かつては広い地域で食べられていた。だから珍味となった現在でも、それを受け入れる文化的土壌が残っていて、商品として価値を持つのではないだろうか。しかし、商品として店頭に並べる以上、一定量用意しなければならないし、安定した供給も必要とされる。

ミツバチのハチノコに、地域による消費の差が見られなかったのは、健康食品で地域を問わない需要があるからだと考えることができる。対して、クロスズメバチのハチノコは伝統食品として認識されているため、地域によって差がうまれる。供給が安定していない国産のハチノコは個人の消費が多く、安定している外国産のハチノコは土産物屋への卸が多いのは、当然と言えるだろう。

パッキングするためにも安定した味のものを大量に作るためにも、機械化は避けられない流れである。この大量生産と機械化に傾いていくことが、伝統から離れていくことだと考えて調査を進めてきた。地元の人間が行うハチノコ取りが、先のことを考えずと続けていくことができるやり方であることを考えると、かつて需要が高まり大量生産に大きく傾いた時に、乱獲によってクロスズメバチが数を減らしたのは伝統から外れたあり方だといえるだろう。また安定した供給を実現するために輸入物に頼らざるを得ないため、諏訪という土地からも離れてしまっている。

だが、土産物のハチノコは伝統から離れてしまったと完全に言い切ることは出来ないのではないだろうか。中国産のハチノコが具体的にどの地域で採取されているか分からないが、中国は日本と同様にハチノコを食べる文化を持っている国である。また、その採取は依然人の手で行われることを考えると、方法の面で本当に伝統から外れてしまっているのかどうか、現段階で論じることはいえない。

また地元の人間も出来合いのハチノコを買って食べることもあるが、缶詰めのハチノコは保存のためにかなり味が濃くなっているので、自分で調理して食べたいとい

う人も多い。曰く「缶詰めのハチノコは炊き込みご飯用」とのことである。またハチノコの採取自体をレジャーの一つとして楽しむ人もおり、保護活動にも熱心で土産物として形を変えて、現代の中で存続しようというよりは、伝統をそのまま保存しようとしている。

ハチノコという伝統食が土産物に形を変えて工業化が進んでいるというよりは、一部そのような流れが出来つつあるといった方が適当だろう。食品としてだけではなくレジャーとしての価値ももっているため、ハチノコを食べる文化や伝統的手法を行う人が今なお多く存在する。また伝統から離れたやり方が難しいということもあり、工業化や機械化をしにくいのだろう。

今後、ハチノコを食べる人やレジャーとして楽しむ人が減って廃れていってしまうのか、何らかの方法によって工業化や機械化をして伝統から離れていってしまうのか、あるいは更に広く受け入れられ人気になり繁栄していくのか、現在分岐点にたっているといえるのではないだろうか。

謝辞

最後に、協力してくださった方々、本当にありがとうございました。皆様の協力がなければ、本文は書きあげられませんでした。

特に、こちらの準備不足で突然の訪問となってしまったにも関わらず、丁寧に対応して下さいました有限会社 山田

養蜂場ならびに原田商店の皆様には深く感謝の意を申し上げます。

文献

- 野中健一 1996 : 「長野県民俗の会 会報19号:昆虫食について」 pp1-18. 長野県民俗の会
- 田中磐 1980 : 「しなの食物誌」 pp283-290. 信濃毎日新聞社
- 今村龍夫 1986 : 「信濃の食文化 ナウマン象狩りから長寿県まで」 pp75-80. 共立プランニング
- 今村龍夫 1992 : 「イロリ端の食文化」 pp121-140. 郷土出版社
- 高野悦子・大西梅子 1975 : 「しなのの味」 pp11-16. 毎日新聞社
- 飯山市「食の風土記」編纂委員会 池田玲子 2005 : 「信州いいやま食の風土記」 pp81-82. 漁村農村文化協会
- 長野県民俗の会 高橋将人 1993 : 「写真記録 信州に生きる. 上巻 (生活編)」 pp144-146. 郷土出版社
- 青沼滋喜 2000 : 「生活と遊びの文化」 pp45-46. 長野日報社
- 長野県農業改良協会 2008 : 「ながの うまいもの 家庭の味・伝統の味」 pp294. 350-351. 西沢印刷株式会社
- 渋谷甲子男 1986 : 「伊那谷の四季」 p90 農山漁村文化協会
- 平沢清人 1988 : 「伊那谷の山村生活史」 pp111-112. 郷土出版社 (漫画)
- 堀田あきお・本田勝一・堀田佳代 2004. : 「本多勝一はこんなものを食べてきた」 pp399. 七つ森図書館 (映画)
- 後藤俊夫 1999 : 「こむぎいろの天使 すがれ追い」 95分. 「こむぎいろの天使」 製作委員会

諏訪市における「藤森」「宮坂」姓の分布

坪川 睦

I はじめに

日本で最も多い名字は佐藤であるといわれている。人数の多い順に佐藤、鈴木、高橋、田中、渡辺、伊藤・・・である。各々よく耳にする名字であるが今回、諏訪市への巡検に行くにあたっての先行研究をしている際「藤森」「宮坂」姓をよく目にすることに気が付いた。調べてみると今回調査を行った長野県諏訪市は、一番多い名字が藤森、次いで伊藤、宮坂となっていた。伊藤という名字は先ほどの日本に多い名字の並びを見ても分かる通り、日本において数が多いようだが「藤森」と「宮坂」は入っていない。さらに長野県における名字ランキングは上から順に小林、

田中、中村、丸山、伊藤・・・となっており、長野県全体としてみてもこの2つは20位以内にも入っていない。どうやら「藤森」「宮坂」姓が多いことは諏訪市独特であると考えられる。

このことからなぜ諏訪市に「藤森」「宮坂」姓が多いのか、さらに諏訪市の中でこのふたつの姓がどのように分布し、なぜそのような分布になるのかを調べることにした。

II 調査方法および調査地について

1. 調査方法

まず諏訪市のタウンページ、ハローページ、住宅地図を

利用することにより、諏訪市の「藤森」「宮坂」姓の情報収集をおこなった。それらをもとに地域ごとの偏りについてある程度の見当を立て、その地に赴き突然ではあるが藤森さん、宮坂さん宅に伺い、姓の多い理由や家系の歴史についての聞き取り調査を行った。聞き取り調査は事前にアポイントメントを取ったものではない。さらに歴史的背景を調査するため名字や諏訪市に関する文献などを読んだ。

2. 調査地と調査日程

調査地に選定したのは小和田、湖南周辺、上諏訪地区である。特に小和田、湖南周辺は偏って分布していたことが選定の理由である。

日程は以下の通りである

7月26日

諏訪市立図書館にて文献、資料探し

7月27日

午前中に小和田の八剣神社周辺に聞き取り調査

7月28日

午前に上諏訪地区（上諏訪茶臼山、上諏訪立石、上諏訪金山など）に聞き取り調査

午後に湖南周辺（湖南大熊、湖南田辺など）に聞き取り調査

調査から戻って地域の偏りを地図で表すことによりさらに明確にし、姓や歴史、諏訪市に関する文献や諏訪で行った聞き取り調査などをもとに分析をした。

Ⅲ 藤森姓と宮坂姓の分布

タウンページで町村別にカウントし、それらの集計結果を表したものが次の図1である。

1. 小和田

図1を見ると、分布に偏りのある地区と、両者が共に集結している地域があることが分かる。まず顕著に集中している箇所が見受けられるのは小和田という地名である。長野県姓氏歴史人物大辞典（長野県姓氏歴史人物大辞典編纂委員会 著）には

「諏訪市小和田の宮坂姓は『諏訪事蹟考』に、京都から某親王が来て埴原市（茅野市）に庵を結び、子孫はこの寺に住み、姓を宮本とし、のちに高島村（諏訪市）に移り、宮栄に改めたという。また、某親王は、諏訪神社初代大祝になった桓武天皇の皇子有員親王ともいう。その子は、姓を宮本と称した。大祝諏訪政満の弟小太郎行満は埴原田城主となり、その末子八郎は姓を宮坂に改め、その子孫が高島

村に移ったという。高島村では御御渡りの守護職を務め、八剣明神を勧請した。天正年間、日根野高吉の高島城建築のため、住民は八剣社を奉じて小和田に移った。同時に明神の側へ蔦稻荷を勧し、宮坂氏の紋章を蔦とした。子孫は小和田を中心に繁栄している（諏訪郷族家計史）」という記述がある。

上記にもある通り小和田には八剣神社がある。この八剣神社周辺は「藤森」「宮坂」姓が密集している。このことについて周辺のお宅に聞き取りをしたところ、「神社が今の場所に移ってくる際に、先祖と一緒にこっちに移ってきた」という話を聞くことができた。かつてこの神社の鎮座は高島の里にあったが豊臣秀吉が高島の地に築城の際、本社を現在の場所に遷座したという。これらのことから、高島という地域と八剣神社に深く関係しているようだ。

2. 湖南

つぎに見受けられるものとしては、湖南地区に「藤森」姓が偏って存在していることだろう。この地区に「藤森」姓は多く存在しているが「宮坂」世帯はほとんどいない。

「藤森」姓は諏訪大社大祝諏訪氏の支流に藤森氏が存在し、その流れの家系が多いという。湖南地区に存在している湖南南真志野や湖南大熊（ともに地名）は有賀など周辺諸郷と共に諏訪上社の所領に属していたことが知られている（中井、高橋1962）。湖南の方面には諏訪大社の上社が有ることや諏訪大社に關係する神社がいくつか存在している。諏訪大社が湖南の「藤森」姓に大きく影響しているのではないだろうか。

3. 豊田文出

図を見ると豊田文出にも偏りがあることがわかる。これは「宮坂」姓が偏って存在している。これは小和田の宮坂氏から、江戸時代に文出村に分家したとも、諏訪市元町の一族で、上原村より文出に定着したとの家伝をもつ系もあると記されている。さらに元町の宮坂家は同家の系図によると

「祖先は藤原姓田中利一、足利尊氏に仕えたとする。玄孫利共の代に浪人し、その子友則は諏訪氏に仕えたと伝える。諏訪氏滅亡後は武田氏に仕え、宮坂と姓を改めた。武田氏滅亡後は諏訪郡上原（茅野市）に住み、のちの有正は下桑原村（諏訪市）の元町に移り、酒造業を始めた。」（角川日本姓氏歴史人物大辞典）と記されている。

Ⅳ おわりに

諏訪市に「藤森」「宮坂」姓が多いと気付いたのは実際に諏訪に行ってからであった。実際に諏訪市で調査を始めると表札や店の看板などを見て「藤森」「宮坂」姓が思っていた以上によく目に付いた。からそこでその所以を深く知りたいと思うようになり、姓についての調査に踏み切った。

図書館にあるハローページなどを利用して各姓を細かい地域ごとに分けると集中している地域や偏りのある地域が見受けられた。二つの姓が驚くほどきれいに分布している場所が存在したり、片方の姓だけが多い場所があったことは、個人的に大変興味が湧くものであった。二つの名字、それらはただ偶然にこの名字が多いわけではなく、偶然に地域差があるわけではない。それらは歴史に深く関わって今に至るものであった。

今回は調査日程が限られていたこと、私が収集した資料や調べた内容が決して豊富であるとはいえず、インタビューに回った地域や件数が決して多いとはいえないということもあり、歴史的背景や分布の理由が深い所まで掘り下げることができなかった。二つの姓のルーツをよりはっきりさせるためにはさらなる掘り下げが必要だろう。ハローページを調べただけでは諏訪市の「藤森」「宮坂」姓を完全に網羅しているとはいえない。これらの点は今後の課題でもある。

坂」姓を完全に網羅しているとはいえない。これらの点は今後の課題でもある。

文献

森岡浩 2008『よくわかる長野県の名字』しなのき書房

諏訪市史編纂委員会1976『諏訪市史 下巻』

赤羽篤(編) 1989『長野県歴史人物大辞典』郷土出版社

志村有弘(編) 2003『姓氏家系歴史伝説大辞典』勉誠出版

西堀杜史1982『信濃の紋章』郷土出版社

角川姓氏歴史人物大辞典編纂委員会 1996『長野県姓氏歴史人物大辞典』

丹羽基二 1981『姓氏の語源』角川書店

広報すわ NO.920 6/15 (<http://www.city.suwa.lg.jp/>) (11月6日閲覧)諏訪市ホームページ

<http://www.city.suwa.lg.jp/www/index.jsp>(11月6日閲覧)

謝辞

今回の調査において市役所の方をはじめ多くの方々に大変お世話になりました。また突然のインタビューにも親切に応じていただいた市民のみなさまにも、厚くお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

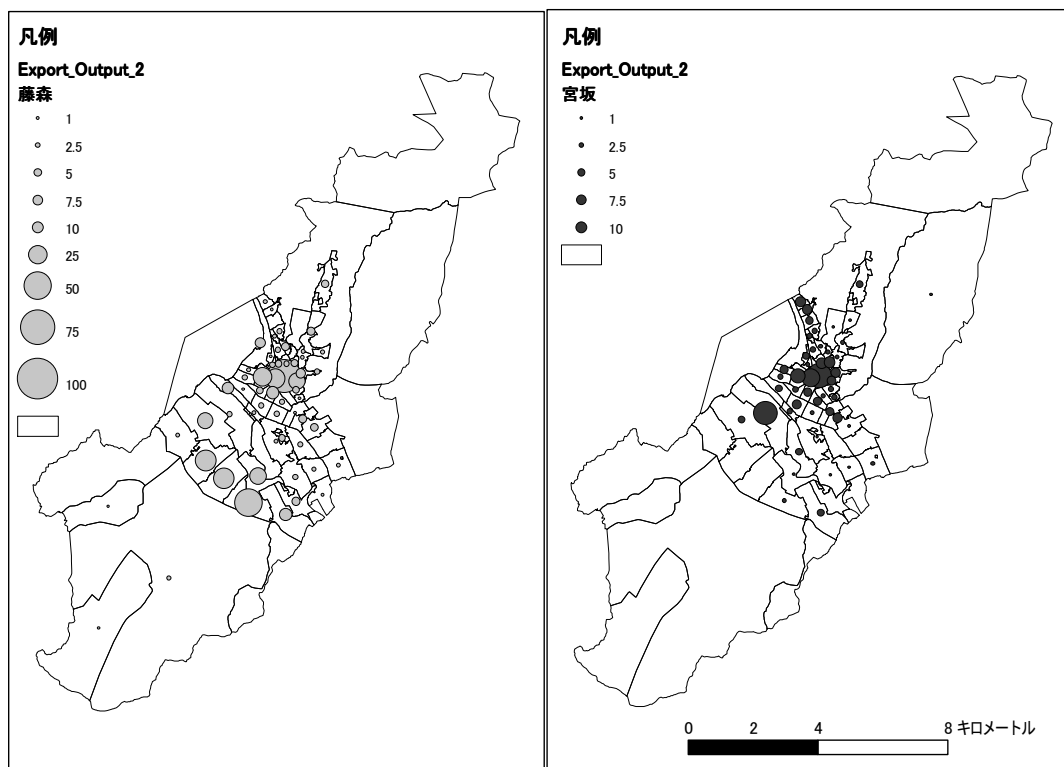


図1 藤森姓、宮坂姓の分布

諏訪地域の商店街の変化とまちづくりについて

石上 和

I はじめに

近年、活気のある商店街というのが少なくなってきたように感じる。人通りが多いはずの駅前商店街であっても、シャッターを下ろした店が目立つ「シャッター通り商店街」が多くなっているように思われる。商店街は様々な業種の店が並び、そこの商店街にいれば必要なものが全て揃う必要があるといえ、開店している店自体が少なくなってしまうシャッター通り商店街は、本来の商店街の機能を失い、その結果、訪れる人も減ってしまうという悪循環も生まれているのではないかと考えられる。そこで今後、商店街自体は存続していけるのかということや、商店街やその周辺地域の活性化といった「まちづくり」において大切なことは何なのかということを諏訪地域の調査で考えてみたいと思う。

II 目的と研究方法

1. 調査の目的、調査地の決定について

今回の調査を行うにあたり、長野県諏訪地域にある本町商店街と御田町商店街が、異なる方法で商店街や地域のまちづくりを行っていることを知った。まず、諏訪市の上諏訪駅前に存在する本町商店街は、2010年に、市や国から補助金を得て、店舗のファサード整備やホーロー看板の設置、電柱の地中化などの、大規模な改修工事を終えた。これほど大規模な工事を行うにあたり、周辺の住民の反対はなかったのか、また、実際に工事の計画を開始して10年近く経った今、商店街の状況や住民の反応はどのようなのかということを知りたいと思った。

同じく、下諏訪町の下諏訪駅からすぐのところにある御田町商店街では、商店街の約半数が空き店舗となってしまうことを受け、空き店舗に匠の工房を誘致する活動を行う「匠の町しすわあきないプロジェクト」という団体が発足した。ここでいう匠とは、ものづくりにおいて独自の技術を持つ人のことである。この商店街では、今や空き店舗数以上に店舗を出店したい匠の方が存在しているという状況である。新しい人と、今までそこに住んでいた人が共存するまちとはどのようなものなのか、またそれに伴い、新しい人の流れは発生したのかということを考えたいと思う。

2. 調査方法

商店街の活性化や空き店舗対策、まちづくりに関連する文献や書物を事前に調査した。

上諏訪駅前散策、諏訪市役所の都市計画課、商工課の方にインタビュー、上諏訪商店街振興組合理事長三村さんにインタビュー、御田町商店街散策、匠の町しすわあきないプロジェクト専務理事原さんにインタビュー。

III 調査結果と考察

1. 本町商店街の改修工事について

1998年に中心市街地活性化法が施行され、諏訪市は、2002年の「諏訪市中心市街地活性化基本計画」の策定により、中心市街地活性化の基本方針を作成した。このことを契機に、本町通り活性化重点プロジェクト事業として、本町ショッピングモールの整備、店舗ファサード改修事業を推進した。この事業は、国土交通省が行う国道20号の無電柱化工事に合わせ、商店街の老朽化したアーケードを撤去し、ファサード(店舗正面)を改修する計画である。この計画では、「レトロといやしのまち」をコンセプトにファサードを改修し、歩道を広げ、開放的で明るい商店街を目指すとした。2006年9月にアーケード撤去工事を始め2010年3月に全ての工事を終えた。

まず、アーケードを撤去するという大規模な工事を行うおうと考えたきっかけは、アーケードが老朽化しており、見た目も悪く、また、1998年、2000年の大雪により倒壊の危険性を感じたからだという。しかし、やはりアーケードの撤去は大規模な工事であり、町の景観や機能を大きく変えるといえるため、当初この計画を話したとき、商店街の住民全員が反対をしたそうである。したがって、地元の人に説明を行い、理解を得ることが、工事をするにあたって最も大変だったといえるようである。また、商店街の改修に向けて進んでいた中、2006年に国の戦略的中心市街地中小商業等活性化支援事業の申請が通らず、工事をするにあたり、補助金を得られなくなってしまったという。これにより、一時は計画が白紙になり、また新たな事業に補助金を申請しなくてはいけないという問題が起こったそうである。このような中で、上手く工事が完了した理由はやはり、まちを変えたいという強い意

うだけではなく、2011年12月には、東京都の秋葉原、御徒町駅間にある高架下の空き店舗で「御田町スタイル」として、匠の方が作品を展示、販売したそうである。このイベントは一定の成果があったようで、この時に東京で作品を見た人の中で、その後下諏訪を訪れた人もいたという。また、ホームページはもちろん、ツイッターやフェイスブックなどのソーシャルネットワークを上手く活用し、様々なネットワークを築いているとも感じた。

さらに、若い世代にまちづくりを引き継ぐ取り組みもなされていた。地元の中学生とともに中山道沿いの中村邸という古民家を再生し、「お休み処」を開業するという取り組みがこれに当たる。中学生の頃から諏訪というまちの特色を理解し、まちづくりの一端を担うことによって、「自分たちのまち」という意識が強くなるのではないだろうか。このように、匠の町しもすわあきないプロジェクトは、幅広い活動を行い、「住みたいまち、行きたいまち、幸福度No.1のまち」を目指しているそうである。

4. まとめ

今回、様々な方から話を伺い、本町商店街と御田町商店街という二つの地域のまちづくりの事例に触れ、まちづくりとは、やはりそれぞれのまちの特徴を考えて行うべきものだと思えた。単に成功例の模倣だけではまちづくりが成功するとは思えない。時代が変化し、人々の生活の仕方が変われば、町並みも変化していくことは当然なことである。しかし、その変化に流されるのではなく、自分たちのまちを住み良いまち、訪れたいまちにしていくことが、大切なことだと感じた。

また、「商店街」という存在は今後も、まちの重要なファクターとして存在し続けるのではないだろうか。かつてのように、生活に必要なものが全て揃えられる程の店が並んでいるというような形態の商店街は少なくなってしまうかもしれないが、本町商店街や御田町商店街のよ

うに、特色ある店が並び、観光地化したりしながら、様々な形で存在していくのではないだろうか。

IV おわりに

今回は諏訪地域の二つの商店街を訪れ、代表者の方に現状の話を伺い、非常に貴重なお話を聞かせていただいた。様々な価値観や考えを持った人々が住むまちを、一つの目標に向けて築き上げていくことは非常に大変なことだと感じた。しかし、多くの人が持っているであろう「自分のまちをより良いものにしたい」という気持ちがあれば、それぞれのやり方で、それぞれに合ったまちがつくられていくのではないかと思われた。今回の調査を行い、自分達の住むまちを、自分達でつくり上げていかなければいけないと改めて感じた。

また、今回は主に、まちづくりの主体となって活動している方や、行政の方に話を伺い調査を行った。したがって、次の機会には、一般住民の方にも話を伺ったり、アンケート調査を行ったりするなどして、より幅広い調査が行えれば良いと思った。

謝辞

今回の調査を行うにあたり、諏訪市役所の都市計画課の方々、商工課の池上様、茅野様、上諏訪商店街振興組合理事長の三村様、三村様の奥様、匠の町しもすわあきないプロジェクトの原様には、貴重なお時間を割いて調査にご協力いただきました。深く感謝申し上げます。

文献

足立基浩 2010.『シャッター通り再生計画 明日から始める活性化の極意』ミネルヴァ書房。

鈴木健介 2010.『ダメな商店街を活性化する8つのポイント』同友館。

『まちづくり』の取り組み —諏訪における地域調査を通して—

奥本 友紀

I はじめに

地域調査に参加するにあたって、『下諏訪宿の機能及び景観の変化』（小島大輔ほか2005）を読んだ。そして、論

文中に書かれていた、住民及び行政によって変化しつつも守られている街並みについて興味を持った。というのも、筆者は、白鷺城として有名な姫路城を見て育ち、幼いころから市をあげて城下町として街並みを形成しようとしている姿を目にしてきたからである。前述の論文を拝読し、果たして自分が育った街は住民と行政の協力のもと、街づくりが行われているのだろうか、住民と行政が協力して行う街づくりとはどのようなものなのだろうか、という思いが出てきた。そして、このような経緯から、筆者は、観光客誘致を念頭に置いた「まちづくり」がもたらす地域経済活性化について調査してみようと考えた。

II 方法

2012年7月25日～28日の間に、各訪問先を訪れ、諏訪地域におけるまちづくりに関する資料をいただいたり、お話をうかがうなどして調査を行った。また、図書館での文献調査、観光地の見学などを実施し、調査を行った。訪問先は以下の通りである。

諏訪市役所観光課
一般社団法人諏訪観光協会
ホテル鷺の湯
諏訪市役所企画調整課
図書館
諏訪市役所まちづくり推進課
やまぶき街道の会
宮坂醸造
新鶴本店
下諏訪町役場商工観光課
匠の町しもすわあきないプロジェクト
間欠泉センター

III 調査結果

1. 諏訪市役所観光課からの聞き取り

諏訪市には自然、温泉、食事などの魅力ある観光資源が豊富にあり、毎年600万人以上の観光客が訪れているようである。諏訪は、バスで3時間、JR特急で2時間程度と、首都圏から近く、気軽に訪れることができる観光地でもある。美術館や博物館が諏訪湖の周辺に点在し、重要文化財に指定された片倉館もあることから、芸術文化を味わいたい人、歴史的建造物に触れたい人など、様々な目的を持った観光客を楽しませることができる。

また諏訪市は、諏訪市、茅野市、岡谷市、下諏訪町、富士見町、原村といった周辺の6市町村が諏訪地方観光連

盟を結成して観光を展開しており、それぞれが補完しあうことで諏訪地域という広い「面」における観光客誘致を心がけているようである。行政と民間が行う体験型プログラム『ズーラ』も、面的観光客誘致の一例である。このズーラは、食べる・呑む、クッキング、クラフト、ジブン磨き、あるく、ヘルス&ビューティー、アート、歴史と文化、スペシャル、といった数多くの体験テーマを掲載しており、講師とともに、自分の興味に合わせた様々な体験が可能である。この多くの体験プログラムは、とりあえず案を出して参加人数が少ないものは無くしていく、という方針のもと進められており、諏訪地域の魅力発掘・発信の手段であるようである。

加えて、国による海外客数増加を意図した政策の影響もあり、諏訪市では海外客の誘致も行っているそうである。「ゴールドルート」と呼ばれる、成田空港⇒東京周辺⇒富士山といった定型的な観光ルートを選択することが多い海外客に、このルートから少し外れ諏訪に立ち寄ってもらえるよう、諏訪の魅力伝達に努めているようである。

最後に、今求められていることとして宿泊客数増加が挙げられていた。多くの人が集まる首都圏から、訪問しやすい距離にあるということは、宿泊をしない通過型の観光地として捉えられやすいということである。宿泊と日帰りとは、この地域にもたらされる経済効果にも大きな差が出るため、経済的な発展を遂げるためにも、宿泊客数増加は重要な課題として考えられているようである。

2. 一般社団法人諏訪観光協会からの聞き取り

海外客誘致、フィルムコミッション、泊食分離、新宿・立川・八王子・有楽町でのPR広告の掲示、HPの作成、観光案内所の運営、イベント主催・協力、観光ボランティアガイドの公募など、諏訪の観光に関する様々な取り組みに携わっている。

まず、海外客誘致については、長野県・信州長野県観光協会・諏訪市や諏訪地方観光連盟と連携してインバウンド事業(※日本国外から入ってくる旅行者数、つまり外国人による日本旅行者数を指す。これに対し、日本人による海外旅行者数をアウトバウンドと呼ぶ。)を行っている。北京や大連での商談会に加えて、中国・韓国・台湾・タイ・香港・上海でプロモーションを行い、エージェンツ仲介の下、諏訪を訪問してもらっているようである。次に、映画・テレビドラマ・CM・プロモーションビデオなどのロケーションを支援対象とし、ロケ地の紹介、ロケ地との交渉・調整、許認可手続きの代行・調整・協力、



図1：諏訪百景（出典：諏訪市役所観光課提供
諏訪フィルムコミッション過去資料）

宿泊施設や関連業者の紹介・手配、周辺ロケ地との交渉・調整などを行う「フィルムコミッション」という事業も推進している。この「フィルムコミッション」という事業は、撮影場所として名前が挙がることで、新たな観光名所の創造、観光客誘致という効果もあるが、撮影隊が訪れるということで、ロケ弁の調達などのために諏訪地域において消費活動が行われると、経済効果が見込まれるという利点もあるようである。

そして、宿泊施設やその周辺地域の人との連携による取り組みとして、重要視されているのが、「泊食分離」という考えに基づく新たな宿泊システムである。かつては、ホテルに宿泊する観光客はホテルの中で食事を済ませサービス満喫するというスタイルが一般的であったが、この方法では、宿泊施設の中でしか消費活動が行われず、宿泊先のイメージしか観光客の記憶に残らない。宿泊施設の外で食事をとることにより、観光客をホテル内だけに留めさせることなく、宿泊施設周辺地にも足を伸ばして、諏訪の魅力を探访してもらう、という考えから生まれたようである。泊食分離のシステムは、より広範囲に及ぶ経済活動による地域活性化も意図していると言える。

3. やまぶき街道の会からの聞き取りによる

かつて栄えた門前町が、街道の土産屋に立ち寄る観光客も僅かという場所が全国各地に存在するが、諏訪大社本宮の参拝者の中には、本宮と前宮の間を歩いて参拝する人も見受けられる。そこで、本宮と前宮をつなぐ街道にある諏訪を一望できる「片山」の鬱蒼とした樹木を排除し、土砂崩れの予防と災害予防を兼ねて、気品・崇高という花言葉を持つ歴史と文化の街にふさわしい花木である「やまぶき」を植樹することを考えたようである。

これは、地元民はもとより、多くの観光客を迎え楽しめる場所として整備し、より活気ある街として、さらに発展させることを趣旨として、会の趣旨賛同者により構成されている。ヤマブキの苗を購入し植え付ける費用を捻出するために住民や賛同者が協力し活動が進められている。反対意見や慎重意見が出ることは当然と考えつつ、広く認知され協力者が現れることを意図して、目立つところから活動を始めていくよう心がけているようである。「長すぎると途切れてしまう。次の御柱祭までに〇〇をやり遂げよう。」と目標設定しながら活動し、できることからどんどん取り組みを進めるようにしているようだ。「現在ここに訪れる観光客は、バスで通過する際軽く立ち寄り、45分程度の滞在しかしていない。しかし、最低でも4時間くらいは滞在できる場所として、見所を増やしていけたら・・・」と展望を語ってくれた。

IV 考察

今回の調査で、身近にできることから始めて、よりこの土地に人を呼び込もうと行動している住民の方々と、海外客誘致といった大がかりな取り組みを行っている行政の姿を見ることができた。やまぶき街道の会の守屋さんがおっしゃった「市ができることと地元民ができることは違う」という言葉を何度も思い出した。今回の調査で私が見聞きしてきた事柄は、住民と行政による「まちづくり」とは違う気もするが、「できることは違う」という姿勢を集団における役割分担だと捉えれば、市が刊行する広報に住民の取り組みの成果が取り上げられる現状を考えると、全く協力体制がないとも言えない。また、同じ住民であっても、小さい頃からこの地域で暮らし街の姿を見て育った人もいれば、引っ越してきてこの地域の風習などほとんど知らない人も居る。したがって、まちに求める環境や、まちに対する思い入れの深さは人それぞれであって当然なのだ。多くの人を動かすためには、時間も労力もかかりすぎるし、何が最善かは時間が経てみないとわからない。現在、この地域で展開されている取り組みというのは、自分ができることを自分に可能な方法で進めていく、というもののなのだろうと感じた。

V おわりに

筆者の調査対象は、住民と行政が関わりながら展開されている「まちづくり」である。しかし、今回現地で調査したところ、事前に考えていた程には、協力関係が強くはなかったように感じた。活動を行っている人たちからは、自ら協力を申し出る者が集って行動を起こすことが最も迅速に計画を実行へと動かすことができる方法だ、

という意見が多く出されていた。協力しなければという義務感などからではなく、まさに少数先鋭の考えに基づいて計画が進められる傾向にあるようである。

また、今回調査を進めていく中で、フィルムコミッションという耳慣れない単語に出会った。そして、この政策は、他の地域でも多く展開されており、今までにも映画やアニメの制作現場で使われていることを知った。実際、巡検後にDVDで借りて観たとある映画のエンドロールに、フィルムコミッションという言葉が発見し、観光政策がいかに身近な場所に潜んでいるものかということを知り改めて認識した。

文献

小島大輔・中村裕子・久保倫子・呉羽正昭, 2005, 下諏訪宿の機能および景観の変化, 地域研究年報, 27, 19 - 40
諏訪市経済部観光課信州諏訪温泉博覧会ブーラ実行委員会, 2012, 第5回信州諏訪温泉博覧会ブーラ

諏訪市, 1995, 諏訪市健康文化モデル都市推進計画-厚生省, 健康文化と快適な暮らしのまち創造プラン事業

謝辞

本調査を進めるにあたり、多くの方々にお世話になりました。ここに深く感謝の意を表します。私の聞き取り調査を快く引き受けてくださり、そして多くのご指摘をくださいました、諏訪市役所観光課の皆様、一般社団法人諏訪観光協会の藤森様、ホテル鷺の湯の皆様、諏訪市役所企画調整課の方々、図書館の方々、諏訪市役所まちづくり推進課の新村様、やまぶき街道の会の守屋様、宮坂醸造の皆様、新鶴本店の方々、下諏訪町役場商工観光課の方々、匠の町しもすわあきないプロジェクトの原様、誠にありがとうございました。また、調査活動全般にわたり格別なる御指導と御高配を賜りました、長谷川先生、水野先生、心より感謝申し上げます。

諏訪の景観とまちづくり

松本江利奈

I はじめに

諏訪地域には、諏訪大社や下諏訪地域の旅籠、古くから諏訪地域の産業として栄えてきた味噌や酒造産業など、歴史ある文化や産業が根付いている。それと共に、文化や産業に関連した建物や、趣ある町並みも未だ残されている。最近では、伝統的な日本建築の価値が見直されつつあり、保全や再生する活動も各地で多く行われている。この、近年注目されている古民家再生や、歴史ある建物の保全に的を絞り、諏訪地域の特徴を生かしたまちづくりの活動の現状と課題を明らかにする。

II 調査方法

2012年7月25日～28日の間に、各訪問先を実際に訪れ、建物を見せていただいたり、資料をいただいたり、諏訪の景観やまちづくりについてお話をきく等して調査を行った。訪問先は、諏訪市役所(都市計画課)、下諏訪町役場(建設水道課)、現地企業(味噌蔵：丸高蔵、酒蔵3蔵：舞姫酒蔵、麗人酒蔵、宮坂醸造、桔梗屋、新鶴本店)、匠の町しもすわあきないプロジェクト(下諏訪：NPO団体)、

田空間工作所である。

III 古民家再生法について(田空間工作所)

田空間工作所は、主に長野県近辺を中心に、古民家・古建築物移築や再生、修復、また、新築住宅の設計・施工を行っている有限会社である。諏訪地域では、諏訪大社秋宮の大社通りに面している旧塚越邸の再生、周辺3軒の町並修景を手掛けた。

伝統的な木造住宅というものは、釘などをあまり使わない、大工さんの技が駆使されているものである。見た目だけでなく、構造的にも、非常にしっかりしている建物である。直しながら使っていく、住んでいくことができるのが日本の伝統的な木造住宅の良いところであるのではないだろうか。

古民家再生を希望する顧客には、一般住宅の方が多く、だいたいその中の半分くらいが持ち家、もう半分が民家バンク(民家を譲りたい人の家を民家バンクに登録し、その情報を民家が欲しい人へ公開し、引き取り手を探すシステム)で探し、建物を購入して頼んでくる人である。お客さんの年代は若い方もいるが、やはり上の年代の方が多いそうである。

IV 上諏訪地域の景観とまちづくり

1. 諏訪市役所都市計画課への聞き取り

諏訪市では、平成21年(2009年)10月に、諏訪市景観計画をうちだし、諏訪市内の良好な景観づくりに取り組んでいる。この計画の中では、地域ごとの特徴を生かすべく、地域ごとに細かく景観形成の基本方針が決められている。また、高さ規制や、色彩基準など、建築物にも制限が設けられている。

景観づくりを進めていく際の問題点として、チェーン店の色、デザインが派手になりがち、ということがある。法的には、商売上の権利があるため、そこまで規制はできないが、ちょっと地味なものにしてもらっているそうである。しかし、その修正作業にもお金がかかるのに、補助制度がないから、この予算措置を設けるのを今後の課題としたい、と市役所の方はおっしゃっていた。また、歴史的建造物の保存・維持のための援助制度もないので、これから景観重要建造物として指定していき、予算措置を設けていくつもりだそうである。

2. 宮坂醸造への聞き取り

創業は1662年。それ以来長い歴史を経て、現在に至る歴史の深い酒蔵である。現在、国道沿いに建っている建物は、2012年4月に新しくオープンした店舗である。新しい店舗は、古民家風の落ち着いたデザインの建物である。近年は、県外や海外からのお客さんの来店も増えてきているので、観光客がきても自信を持って見せられるように、しっかりしたものをつくったという。

まちづくりについては、行政主導よりも、民活の力で、それぞれ自分のやりたいことをやるべきではないか、商売人の競い合いが、まちを良くするのではないか、と考えているという。

5軒で協力して、このエリアを美しく、楽しくしようというのが当面の目標だそうである。

3. 舞姫酒蔵への聞き取り

舞姫酒蔵は、明治27年(1894年)創業の酒蔵である。重厚な店構えの店舗が特徴的である。蔵や、店舗、事務所も、形を変えたり、壊したりはしていないので、建物は創業当時からそのままである。修復はその都度行っており、昭和57年(1982年)頃には、木枠の窓からのホコリや、隙間風をなんとかするべく、木枠の窓の中にアルミサッシの窓を入れて、二重構造にした。二重構造なので、外から見たら以前と変わらない木枠の窓であり、見た目、

外観を守るため工夫したと話した。

諏訪の、蔵のある風景を残していきたい、まちづくりの一つとして残していかなければと思っているから、なんとか維持していきたい。今は特に行政側とは関わっていないが、今後、市の文化財として歴史的建造物を守っていく施策が多少なりとも必要となってくるのではないだろうか、とおっしゃっていた。

4. 呑み歩きイベント

上諏訪駅前の国道20号を茅野方面へ500mほどいったところに、約300mとい狭い範囲の間で5軒の酒造が並んでいる。5蔵というのは、舞姫、麗人、本金、横笛、真澄の蔵元のことである。この地理的な特徴を利用して、5軒の酒造が共同で行っているイベントがある。毎年3月と10月に行っている、2000円で、諏訪の5蔵のお酒を試飲しながら歩いてもらうという呑み歩きイベントである。はじめは主に地元の人たちが訪れるイベントだったが、今では、地元の人が半分、残りは遠方から訪れる人で、諏訪に多くの人が集まってにぎわうイベントとなっている。

5. 丸高蔵への聞き取り

丸高蔵の3つの建物(丸高蔵、吉沢蔵、鯉沢蔵)は、大正時代に移築され、大正5年(1916年)、味噌産産を始めた。3つの建物は、内装は時を経て用途に応じて変化させてきたが、外装は昔のまま維持しているとのことである。

事務所と店舗として使い始めた理由は、せっかくおもしろい建物があるのだから、生かしたいと考えたため。まめに修理し、建物を維持している。2011年には登録有形文化財に指定された。

V 下諏訪地域の景観とまちづくり

1. 下諏訪町役場建設水道課への聞き取り

下諏訪町では、平成17年(2005年)度から「街なみ環境整備事業」を導入し、住民が主体のまちづくり活動への支援を行っている。住民の主体的なまちづくり活動に対して助成金をだすこと、公園整備や道路の美装化などの公共事業、まちづくり協定に基づいた住宅の修景にかかる費用への助成金、以上の3つが主な内容である。

現在は、「下諏訪宿横町木の下まちづくり協議会」、「下諏訪宿湯田町まちづくり協議会」、「下諏訪宿立町まちづくり協議会」の3つの組織が区域ごとに設立され、住民どうしで協定を結び、活動を行っている。

現在の懸念事項としてはメンバーの高齢化により、空き家が増えてきて駐車場になってしまうことや、建物を

守っていく主体が不足して今後の持続性への不安があることがある。

今後の展望としては、修景助成を増やしていきたいということ、区域の拡大につとめていきたいということ、また、広報誌や資料を配ったりして、町民の意識の底上げを行いたいということである。これから3つの会の連携や、情報交換の場を設けたりするなど、広く色んな人の意見をとりいれていきたい、とおっしゃっていた。

2. 桔梗屋への聞き取り

桔梗屋は、元禄3年(1703年)創業、現在12代目の老舗旅館である。諏訪大社・下社の門前町と温泉の宿場として栄えた下諏訪の、中山道と甲州街道の分岐点に位置している。

新しいものもあるけれど、昔のもの、先人の築いてきたものの大事さにも気づいてほしいという思いのもとで、営業を続けている。地域の特性、歴史を誇りにしてまちづくりを進めていきたいと考えているという。今でこそ、下諏訪の宿場町や、歴史的なものが再評価されるようになってきたが、以前は、きらびやか、派手なものが良しとされ、古いもの≠汚いもの、という風潮の時代もあったそうである。何を美しいと感じるか、その美的価値観の違いは、人によっても異なるし、時代によっても変わるものだから、どのようなまちにしていくなか、統一していくことは難しいと感じた。

3. 新鶴本店への聞き取り

新鶴本店は、明治6年(1873年)創業の和菓子店である。木造の重厚な店構えで、塩羊羹で有名である。店舗は、正確な記録は残されていないが、資料をたどると明治初めに建てられたのではないかと、思われる。外装も昔のままだし、内装も昔から特に変化はないようである。不便な面もあるが、不便な中でも、その中でいかに便利に過ごすか工夫をしていけばよいのではないかと話していた。

新鶴本店は、住民同士でまちづくり協定を結んでいる^{よこまち}横町木の下地区にあたり、横町木の下の通りで、それぞれ統一した看板を手作りして掲げている。この活動によって、他の2つのまちづくり協議会に対しても、良い影響を与えられたらいいと考えているそうである。3つの協議会みんなでひとつになって活動することに関しては、規模が大きくなると、多くの人が活動の中心から遠のいてしまうのではないかと、小さいコミュニティで、皆の意見を反映できる場で、やっていくことも必要なのではない

か、とおっしゃっていた。

昔ながらの町並みを残したいという思いもあるが、まちの中にはたくさんの方がいるわけで、皆が皆そう思っているとは限らない。個人個人でそれぞれ建てたい家があるのに、それを規制で無理強いして良いのか。多少の我慢は必要かもしれないけれど、誰かの犠牲の上に成り立つ町は良くないと思うし、皆が気持ちよく暮らしていくためにはどうすればよいか、考えていく必要がある、と話してくれた。

4. 匠の町しもすわあきないプロジェクトへの聞き取り

匠の町しもすわあきないプロジェクトは、地域の価値づくり、資産価値の向上を目的とし、住む人が心地よい街を目指して日々活動しているNP0団体である。

活動の内容としては、イベントを企画したり、商店街の空き店舗を貸し出して工房やギャラリーなどとしての利用を推進したり、まちづくりに尽力している。

あきないプロジェクトの原さんの考えるこれからのまちづくりに必要なこととして、まずはできることから始めること、あるものを活かすこと、があげられる。原さんは、そもそも歴史ある景観を必ずしも残さなければならないか、その点をも疑問に思う、と話した。どんなに残したくても残らない場合もあるし、無理していてもまちづくりは続かない。残せるものを残せばいい。できることから始めて、できる範囲のことを、継続して続けていけばよいのではないかと。そうおっしゃっていた。

誰がどうイニシアチブをとるか？という問題に関しては、役場に任せるというよりも、自分たちのまちのことなのだから、自分たちのことは住民の自分たちで考えるべきなのではないかと答えた。行政がかかるとすれば、例えば、使われてない古民家を借り上げて、安く貸すようなシステムをつくるなど、そのように住民の自主的な動きをサポートする施策を行ってはどうだろうか。

このように、少しずつ、継続的にやっていけば、歴史的なものも、全ては無理でもそれなりには残していけるのではないかと、と原さんは語った。

VI おわりに

上諏訪と下諏訪のまちづくりの進め方や、考え方は、同じ諏訪地域といっても大きく異なることがわかった。上諏訪地域では、行政主導というよりは、各々に好きに、自由にやって、それを皆で競い合って総じてまちの活性化や景観向上につながればよい、という考え方だった。

個々人の力で、それぞれが意識を持って工夫して活動していた。それに対して下諏訪地域では、役場とも協力し、それぞれ小さいながらもまとまりを持って、できることから、少しずつまちづくりを進めている。

今回の巡検で感じたのは、価値観の違いによるまちづくりの難しさである。まちには、様々な意見、考えを持った人がある。何を美しいと感じるか、その美観意識には個々人により差があり、まちづくりの場においても意見が異なってくる。生活を営む住民や、商売を行っている人、それぞれに考えややりたいことも異なる。いろいろな人がいる中でどう折り合いをつけていくか、そこが難しい点だと感じた。

また、同じ諏訪地域といえど、歴史的背景も異なるし、有する景観資源も違う。上諏訪には上諏訪の、下諏訪には下諏訪の、まちづくりがあり、それぞれやり方、進め方は異なってくる。同じ地域でもまちづくりの様子は全然違うということがわかった。

また、歴史ある建物の保存、維持には多少なりともお金がかかる。この点は街並みが保存されていく上で大き

な壁である。しかし、少しずつ、直しながら維持させていったり、登録有形文化財制度を利用したり、行政側の支援策を利用したり、工夫しながら、現状は維持しているだろう。一方で、あるものを活用する、できることから始める、お金のかからないまちづくりの方法もある。まずはそこから、始めていってはどうだろうか。自分の住んでいるまちのことである。住民自ら、自分たちのまちについて考えていくべきであろう。今後も活発な話し合い、活動が継続して行われていくことを期待する。

文献

- 宇井洋(2001)「古民家再生住宅のすすめ」晶文社
大谷勝己(1998) 人づくり、まちづくりと博物館(特集 信州- 諏訪とその周辺—地域文化形成と施設づくり)—(地域振興と小美術館・博物館). 建築と社会. 79(3),68- 69
品田恭市編「古民家スタイルvol.12 マンションで古民家を味わう。」株式会社ワールドフォトプレス

諏訪地域における観光政策

相曾 瑞希

I はじめに

長野県諏訪地域は、諏訪市、茅野市、岡谷市、下諏訪町、富士見町、原村の6市町村で構成されている。この地域は温泉、諏訪大社、湖上花火大会、美術館など観光資源が豊富であり、諏訪湖を中心とした観光が行われている。先行研究では、諏訪の観光の歴史や、諏訪地域の6つの市町村がそれぞれどのような特徴を持った観光を展開しているのかについて考察が見られる。

諏訪についての下調べを進めるうちに、観光資源に恵まれた場所であることが分かった。交通面でも、東京や日本海側の都市からは比較的行きやすく、僻地というわけでもない。更に、諏訪に行くためには電車、車、バスなど、多くの選択肢がある。日本に数多くある観光地の中には、交通の便が良くないなどの理由で集客をしづらい場所があるが、諏訪地域はそれらの地域と比較しても、恵まれていると言える。つまり、今現在よりも多くの人に伝わるようにPRをすれば、更に人を集められると考え

られる。そこで本稿では、諏訪地域の中でも、諏訪市と下諏訪町の行政と民間で、それぞれどのような観光客誘致がなされているのかを明らかにし、諏訪地域の観光政策について考察する。

II 調査方法および調査地について

諏訪市役所観光課、一般社団法人諏訪観光協会、ホテルA、片倉館、ホテルB、新鶴本店、下諏訪町役場商工観光課を訪問し、直接お話を伺った。

III 調査結果と考察

1. 諏訪市・下諏訪町の観光の概要

諏訪地域の中心である諏訪市には自然、温泉、食事などの魅力ある観光資源が多く存在し、毎年600万人以上の観光客が訪れている。首都圏からバスで3時間、JR特急で2時間程度と近く、手軽に訪れることができる観光地である。諏訪の観光の中心には諏訪湖があり、人の心を和ませる存在である。諏訪湖の周辺では、夏には諏訪湖祭湖

上花火大会などが行われ、冬には御神渡りが観測されることもある。16か所の美術館・博物館があり、それらに関連したイベントも開催されるなど、芸術文化に詳しい観光客を楽しませるものとなっている。また、片倉館は重要文化財に指定されており、そのような建造物は歴史的に見ても興味深い。片倉館は、昭和3年に建設された温浴施設である。諏訪市の中心地にあり、広い駐車場や広場が併設されているため、市や観光協会主催のイベントが行われる際に利用されることもある。毎年12月下旬に行われる光の祭典や、ズーラなどがその例である。また、会館棟の貸し出しや庭の解放が行われるなど、地域住民にも開かれている。周囲の旅館同士で提携し、割引券の配布や駐車場の貸与を行っている。

下諏訪町は、南が諏訪湖に面し、北には山があり、岡谷市・諏訪市・松本市・長和町に接する町である。下諏訪町には、7年に1度御柱祭が行われる諏訪大社下社秋宮があり、古くから門前町・宿場町として栄えてきた。また、温泉や自然に恵まれ、万治の石仏、儀象堂、奏鳴館、青塚古墳といった観光資源もあり、人口がおよそ2万人の町に、毎年2万人ほどの観光客が訪れる。

2. 行政による観光客誘致

諏訪地域には豊富な観光資源があるが、一方で課題も多くある。首都圏からアクセスしやすく、集客できることはメリットでもあるが、交通状況が良くなると、宿泊をしない日帰りの通過型の観光地になってしまう。実際、上諏訪温泉には年間350万人もの観光客が訪れるが、宿泊していく観光客はその中の51万人となっている。日帰りとは宿泊とは旅館や周辺施設の収入が大きく異なるため、宿泊客を増加させることが、町の発展のためにも重要な政策となる。下諏訪町には、御柱祭がある年には多くの観光客が訪れるが、その他の年には少なく、減少傾向である。諏訪市と比較すると、下諏訪町には大型旅館が少ないという違いがある。

そこで、諏訪地域では観光客誘致のために様々な政策が行われており、その中でも調査中によく耳にした政策とPR方法を以下に述べる。

1) 観光客誘致のためイベントの実施

諏訪地域は単独で観光を展開しているのではなく、周辺の6市町村（諏訪市、茅野市、岡谷市、下諏訪町、富士見町、原村）の間で観光連盟を結成している。これまで観光というと、市町村をそれぞれ見ていくものであったが、それぞれが足りないものを補い、共有していくこ

とで、諏訪地域という面で観光を拡大していくことを目指している。面的な観光客誘致の政策には、ズーラや諏訪湖まちじゅう芸術祭などが挙げられる。ズーラは行政と民間が行う体験型のプログラムであり、今年が5回目の開催である。「ズーラ」という名称は、諏訪の方言で、「そうでしょ、いいでしょ」を意味する、「ほうずら、いいずら」が由来となっている。多くのプログラムがあるが、観光客が集まらず中止になるものもある。しかしそれが、諏訪地域の魅力を考えるきっかけにもなり、取捨選択をしていく中で、人気が出たプログラムもある。諏訪湖まちじゅう芸術祭は、諏訪湖周辺にある15館の美術館・博物館の芸術祭で、芸術文化に詳しい観光客だけではなく、一般の観光客にも芸術に親しんでもらい、諏訪をさらによく知ってもらうきっかけにしたいという狙いがある。

下諏訪町から見ると、諏訪地域の6市町村の連携に関しては、利用させてもらうという意識がある。「下諏訪」単独ではなく、「諏訪地域」として見ることで、まず諏訪に来てもらうことが重要であると考えている。つまり、ブランド力を持ち、6市町村が一つになって、横の連携をしながら、観光政策を進めていくことが必要となる。また、時代が変わることでこれまでの状態では対応していけない事柄も出てくるため、これからの観光スタイルを考えなければならないというお話を、町役場の方から伺った。

2) 外国人観光客誘致「インバウンド」

インバウンドとは、観光業界で用いられる言葉で、他地域の客を誘致するという意味がある。国が海外からの観光客数増加のためにインバウンド政策を行っていることもあり、諏訪市でも海外客の誘致を行っている。海外客は成田空港に到着し東海道を通り、中部国際空港や関西国際空港などから帰国する、ゴールデンルートと呼ばれる観光ルートを通ることが多い。そのルートから少し外れ、中に入ることで諏訪に立ち寄ってもらい、諏訪へのリピーターを増やすことに取り組んでいる。近年は中国からの観光客が多いが、台湾などからの修学旅行客の増加も見られ、その修学旅行の日本滞在中の1泊を諏訪にしてもらうなどしている。海外客は待っていても来ないため、地域の魅力を伝えていくことが必要となる。また、施設をよくするだけではなく、「おもてなし」をすることが大切であり、地域の人々が地域外の人に向く必要があるという。

3. 民間による観光客誘致

1) 旅館における「泊食分離」の導入

「泊食分離」とは、これまで旅館は「1泊2食」が普通であるという認識であったが、それを「1泊1食(1泊朝食付き)」にし、夕食を旅館以外の場所でとってもらうようにするというものである。これによる宿泊率の向上を目指している。泊食分離を行うことで宿泊料金も安くなり、宿泊客が地域の飲食店に行きやすくなる。これはビジネスホテルを手本とした取り組みであり、ホテルにとっても人件費を削ることができるため、経費を下げる事が可能になる。この取り組みにより、売り上げは低下するがマイナスの要素にはならないため、ほとんどのホテルが今後加盟する予定である。

2) 民間の施設等のPR方法

A. 諏訪観光協会

諏訪観光協会では、観光意識の普及向上、外国人観光客の誘致、観光ボランティアガイド、フィルムコミッション、泊食分離などを進めており、その中でも海外客誘致については、長野県・信州長野県観光協会・諏訪市や諏訪地方観光連盟と連携してインバウンド事業を行っている。北京と大連で商談会を行い、中国・韓国などでプロモーションを行い、両国の観光業者に諏訪を訪問してもらっている。生活習慣の違いによる問題もあるが、ゴールデンルートの中に1日でも諏訪を訪問してもらおうと、諏訪観光協会は試みている。

また、諏訪観光協会は、新宿・立川・八王子・有楽町でのPR広告の掲示、HPの作成、スマートフォンでの街中案内や、観光展・キャンペーンへの参加、観光案内所の運営、花火大会の開催、イベントの主催・共催・協力など、諏訪の観光に関する様々な事柄に関係している。

B. 国の重要文化財 財団法人片倉館

片倉館が行っている観光客誘致としては、大手代理店との提携、旅行出版社への原稿や画像の提供、高速道路のサービスエリアにポスターの設置などが挙げられる。入浴客が減少していたが、昨今マスメディアに取り上げられ、増加が見込まれている。これまでもテレビ放送を観て片倉館を訪問した観光客がいたため、取り上げられることは重要な集客の手段の一つと言える。

C. 新鶴本店

下諏訪町にある、塩羊羹で有名な和菓子店である。下諏訪町は小さな町であるため、町役場や観光協会などと連携して観光を推進している。広告を出していないが、テレビなど取材があると、その番組を観て訪れる客もいるので、広告効果を考えて、依頼があれば受けている。また、HPに関しては、必要な情報だけあればよく、外部

に依頼していない。

下諏訪町の観光の問題点としては、滞在時間が30分程度と短く、宿泊客も少ないことが挙げられる。その対策として、3年前に99分間の町歩きの地図を作成したそうである。

以上の訪問先では、2つの事柄をよく耳にした。一つは、諏訪地域の6市町村で一体となつての観光政策である。それぞれの市町村には特徴があり、お互いの良い部分を出し合うことで諏訪地域としての魅力が増えるという。岡谷市で卓球大会を行い、上諏訪に宿泊するという試みもその一例である。諏訪市役所で、「諏訪地域全体で回遊性を持たせる」ということも伺ったが、そのような取り組みを行えば不便が解消され、観光客の満足度が高くなり、リピーターになる可能性も十分ある。

また、とりあえずやってみるものの重要性も感じた。行政においては費用対効果という言葉がよく用いられるが、観光においては「まずやってみる」ことが重要である。案を多く出し、捨てることも必要であり、失敗を恐れずに最終的に成功するための経験的失敗と捉え、派生していくものに期待をしているという。観光は、その時代と共にスタイルが変わる。その変化に対応し、客に満足してもらうためには、とりあえずできることから一つずつやっていき、また、客の声にも耳を傾けながら、必要なことを抽出していく方法が良い。しかしその場合にも、全てを変化させるのではそれまで培ったものが消えてしまうため、本当に変化させるべきものは何かをとらえることも重要になっていくのではないかと考えられる。

IV おわりに

諏訪観光協会でお話を伺った際、観光協会の方に、何か諏訪の観光を発展させるために良いアイデアがないかと聞かれた。そのため、一緒にお話を伺っていた友人たちと、スマートフォン用のHPの作成の提案をしたところ、初めての提案であったようだった。スマートフォンは20代の所持率が最も高く、身近なものになっている。しかし、他の世代には20代ほど普及していないため、これまではそのような意見が出なかったのではないかと感じた。その反対に、それぞれの世代や性別にしか提案できないものが必ずある。つまり、色々な世代や性別の人が集まり意見を出し合っていくことで、より過ごしやすく、より多くの客層に来てもらえるようになるのではないだろうか。また、それぞれの客層に適するPRの方法もあると考えられる。それを今後も考察していくことが課

題であると言える。

謝辞

今回の調査を進めることが出来たのは、諏訪市役所経済部観光課、一般社団法人諏訪観光協会、ホテルA・B、財団法人片倉館、新鶴本店、下諏訪町役場商工観光課の皆様に、インタビューへの協力をして頂いたおかげです。協力して頂いた皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。

文献

諏訪市 2012. 『第五次諏訪市総合計画 基本構想』諏訪市
諏訪市企画部企画調整課 2012. 『諏訪市勢要覧2012』諏訪市役所
諏訪市経済部観光課 2012. 『平成23年観光動態要覧』諏訪市経

済部観光課

諏訪市経済部観光課 2012. 『グラフで見る諏訪市の姿』諏訪市
経済部観光課

諏訪市経済部観光課 2012. 『諏訪市観光ガイド』諏訪市経済部
観光課

Web site信州 長野県公式ホームページ. <http://www.pref.nagano.lg.jp/suwa.htm> (最終閲覧日：2012年12月8日)

信州諏訪温泉博覧会ズーラ公式ホームページ. <http://www.zoola.jp/> (最終閲覧日：2012年12月8日)

長野県下諏訪町の観光情報おいでなしてしもすわ公式ホームページ. <http://shimosuwaonsen.jp/index.php> (最終閲覧日：2012年12月8日)

諏訪地域における人々の空間認識と地域内外の結びつき

若山 沙織

I はじめに

山に囲まれるということは外敵が入りにくいという利点があるが、それは同時に交通路が制限されてきたということである。峠を越えるルートは必然的に限られ、その結果直線距離とは異なった地域のつながりが生まれることとなった。また、人の出入りが少ない環境において、常に交流するのは限られた地域となってしまう。諏訪盆地は周囲を北東にかけては八ヶ岳に連なる山々、南西にかけては南アルプスに連なる山脈に囲まれた盆地である。険しい山に囲まれているという地理条件で、諏訪地域内ではどのような結びつきが生まれたのか、またこの地形によってどのような他地域との交流が育まれてきたのか。

今回の大巡検では、現地の住民の方へのインタビューを元に、諏訪の人々の中にある「諏訪」という空間認識を考察していった。また、過去の空間認識を文献で、今現在の空間認識をインタビューで出来る限り明らかにしていく。

II 調査方法および調査地について

事前に諏訪地域の資料を読んだ後、現地では聞き取り

調査を中心に行う。駅前、いきいき元気館、諏訪湖を巡回するコミュニティバス『スワンバス』車内にてインタビュー調査を行った。当初は駅前で実施予定であったが、ゆっくり話をきくことができなかったため、スワンバスやいきいき元気館でも行った。なお、このインタビューは事前にアポイントメントを取ってのものではなく、その場で了承をとり行った。また、インタビューの要領が悪かったことと、乗客がいつ降りるのか分からないために、インタビューが不十分なまま終わってしまったケースもある。また、途中下車した下諏訪駅にて、駅の案内所の方にも話を聞いた。

インタビュー内容は以下の通りである

- 1 在住地
- 2 諏訪についての意識
- 3 諏訪からどこへ行くか（松本か甲府か、東京か長野か）
- 4 諏訪人気質とは？
- 5 諏訪でおすすめのものは？
- 6 その他

III 諏訪の交通について

1. 諏訪の物理的繋がりについて

1) 中牛馬運送

明治初期において、長野県内各地や隣接各県を結ぶ主な交通運輸手段には中牛馬運送があった。これは牛や馬の背に荷物を載せて運ぶ運輸方式で、江戸時代の信州において特に発達した。この運送方式が発達した理由としては、規制の厳しい中山道、北国街道などの主要街道よりも、補助的な脇往還の方が好都合であったからだ。また、このような道は峠越えが多く道も狭かったため、荷車などの通行には適さなかった。そのため、こうした街道に適した牛馬輸送が発達したと考えられる。明治5年には事業の組織化がはかられ、ほぼ県下全体を網羅する信濃中牛馬会社が設立されている。道路の整備や橋の建設が進み、明治20年代ごろから荷馬車が主流となった。

2) 鉄道交通

中央本線は東京駅を起点に新宿・八王子・甲府・上諏訪・塩尻・木曽福島・多治見を経由し、名古屋に達する全長396.9キロメートルのJR線である。八王子・名古屋間が明治21年から東西から建設が進められ、明治44年に全通した。この鉄道を建設する話は、信州に鉄道が通るという期待を政府に裏切られた松本・諏訪地方の商人が活発に運動を展開したことから始まる。駅設置においては、駅を敬遠する地元民の反対運動が活発であった。例えば、茅野駅や上諏訪駅では「優良農地が潰れる」という農民の土地不売運動にあって、予定からの変更を余儀なくされた。富士見・青柳・茅野・上諏訪・下諏訪・岡谷の六駅のうち、予定通りに決まったのは下諏訪駅ぐらいである。このような鉄道の開通は旧来の陸上交通、水上交通を衰退させていった。

2. 諏訪の水上交通

天竜川などの河川を利用して発達した輸送方式として通船がある。江戸時代から考案されていたが、陸上輸送によって利益を得ていた宿場などの反対が強く、実現したのは遅い。天竜川においては、明治五年に現在の岡谷市と遠州灘に面する河口の町である静岡県竜洋町との間に通船が開かれている。なお、流れの激しい信州の川を往復するため、上には多くの日時が必要となる。

3. 諏訪の交通のその後

脇往還の役割も低下したため、地域の伝統的・特徴的な輸送手段であった中牛馬そのものも衰退していった。それに伴い、旧来の交通機関に依存していた宿場町などの要衝も急速に寂れていった。旧来の交通機関は完全に

消滅したのではなく、鉄道の輸送力を補う形や大量輸送の力の届かない地域において命脈をつないでいた。しかし、鉄道に続いて登場したトラック輸送によって、これらの伝統的な輸送機関は完全に葬り去られた。

現在では中央自動車道が全通し、中央本線は高速バスなどとの競合が激化している前途多難な路線だといえる。

IV 文献から読み取れる諏訪の心理的繋がりについて

1. 諏訪弁

諏訪弁は諏訪地域で話される方言である。地理的にも歴史的にも山梨県に影響を受け、甲州弁に類似性がある。長野県の方言のなかでは言葉が荒い方で、年配者同士が普通に会話していても、周囲には喧嘩しているように聞こえる事がある。

2. 諏訪人気質

長野県民の性格特性を鳥に例えて比較した言葉に「松本のスズメ・諏訪のトンビ・上田のカラス」というものがある。このなかでの諏訪は、「トンビのように虎視眈々と獲物を狙い、おいしい所だけをかつさって行く」という扱いになっている。諏訪がかつて宿場町であり、多くの地域より商人が多く、損得勘定に対して敏感なのではというイメージからきているのだと推測できる。

V インタビュー結果

調査の結果12人から回答を得られた。ただし、全ての項目に答えてもらえたのは2人のみであり、残り10人分のデータにおいては答えてもらえなかった項目がある。

1. 地域内の繋がりについて

『諏訪』という空間的な広がりに関する人々の認識には、主に二パターンがあった。

最も多かった一つ目は下諏訪・上諏訪を『諏訪』とするパターンである。そこに岡谷市を入れるかどうかは人それぞれであったが、下諏訪・上諏訪は外せないようだ。『諏訪』の名があるからということも理由であろうが、古くからある集落として、まず『諏訪』と言えばここをさすという意識のようだ。また、岡谷市は明治時代以降紡績で急速に発展したため、歴史のある下諏訪・上諏訪とは別だとする人もいた。そこには急速に発展した岡谷市に対する複雑な感情が見られた。

二つ目は諏訪弁を使う人がいる地域を諏訪とするパターンである。諏訪弁は長野県の方言のなかでも言葉が荒くきこえることもあり特徴的だからではないかとインタ

ビューの中で説明する方もいた。隣接する地域である伊那では「だに（一であるの意）」と同じ長野県の方言でも柔らかい音なのだが、諏訪弁では「だえ」と幾分強い音となる。この他の地域とは異なる諏訪弁を使う地域という区別ようだ。ただ、諏訪に行ったときには特に諏訪弁を耳にしなかった。考えられる理由としては、

①他地域から来た初対面の人間には標準語を使用する（打ち解けていない）

②現在ではあまり使われていない

③たまたまインタビューに応じた人が諏訪弁の強い人ではなかった

などが考えられるが、インタビュー数の少なさから、どれも推測の域を脱しない。

他にも「諏訪湖の周りが諏訪である」という答えや、「諏訪郡、ただし高原の方は含まない」という答えもあり、答えには散らばりがあった。

2. 地域外の繋がりについて

近い地域として「買い物に行くなら松本か甲府か」、遠い地域として「出かけるなら名古屋か東京か」と尋ねてみたところ、近い地域についてはばらつきがあった。しかし、遠い地域としては、全員が東京をあげた。近い地域については場所に法則性は見られず、理由はさまざまであった。また、買い物は郊外のスーパーで十分という答えもあり、交通の便が良くなったことは流通も良くなったことでもあり、地域外に赴く必要性というのは減っているという面を感じた。一方、良い治療を受けに地域外へ向かう人もいることから、物ではなくサービスなどを受けようとする他地域へ出て行く必要性はまだまだあるという面も見えた。

3. 諏訪人気質について

諏訪の地域の特徴というものを知りたくて投げかけた質問だが、この「諏訪人気質」という言葉自体知らない人もいた。また、諏訪地域において酒造や味噌製造など

の製造業が盛んであることから、職人氣質が多いともいわれているが、職人のような特殊な職業の人のみの気質なのではないかということだった。

ただ、インタビューの受け答えが、自分なりの解釈を交えて説明しているところを見ると、「信州人の議論好き」のように、自分の意見をはっきりと表明する傾向があるのではないか。

4. 諏訪といえば何か

諏訪といえば何を思い浮かべるかも尋ねてみたが、やはり御柱祭と花火大会が上がった。とくに御柱祭についてはインタビューした人はどのひとも行事の内容について詳しく説明した。このことから、御柱祭が単なる観光や一部の人だけの行事ではなく、諏訪の人びとの生活に根付いている身近な行事であることが感じられた。花火大会は調査時期が丁度その時期であったこともあり、是非観に行くべきだと勧められた。歴史の浅い行事だが、諏訪の人びとにとって他の地域から来た人びとに誇って勧めることのできる、立派な地域の目玉のようである。

VI おわりに ～今回の調査を終えて～

今回のインタビュー調査はアポイントメントなしで行ったため、思わぬ話をきくことができた。その反面、インタビューが主にコミュニティーバスの利用者だったため、全体的にデータの年齢層が60から70代に偏ってしまった。諏訪地域の若い世代や働いている世代の声が聞けなかったこと、また12人中5人が岡谷市在住というように、回答者の在住地も偏りが出てしまったことも残念である。

諏訪の地域的な結びつきについてははっきりとした発見はなかったが、会津と長州のようなものが甲州と諏訪であるのか、諏訪人としての心のよりどころはどこにあるのか、若者はどのように諏訪を捉えているのか。興味は尽きない。

企業誘致の限界と地域経済における一考察

鎌田 亜希

I はじめに

1920年代以降、わが国における自治体の「企業誘致プー

ム」といわれる時代があった。実際、企業誘致のための企業立地関連補助金額の引き上げ競争が激化し、企業誘致活動が活発化した。これは、自治体の誘致企業からの税収増加や雇用の拡大、地域産業の活性化などのメリットがあるため、いわゆる外部資源導入による地域振興策として、より重視されていたことを象徴していたといえる。

II 諏訪地域の工業展開の特徴とグローバル化における産業構造の変遷

諏訪地域は、1920年代の大恐慌を境に製糸工業は衰退し、製糸業に代わる企業誘致が促進され、第二次大戦中には大都市圏からの疎開工場が多数立地した。これにより、戦時中の機械関連疎開工場の立地と地域内への技術の伝播を達成した歴史を持っている。

現在の諏訪地域の工業発展においては、諏訪地域に独特の様々な要因によって、技術とマーケットとの間での相互作用により起きている。諏訪地域は、歴史的な技術の蓄積を基に、企業としても地域レベルとしても積極的に域外マーケットとの関係を模索してきており、この関係は切っても切り離せないという興味深い点がある。換言すると、深い技術蓄積、頑健な域外マーケット(海外含む)との関係性、ならびにそれら両者のダイナミックな相乗効果が創発されている点が特徴であると思われる。諏訪地域の競争力維持のカギとなる技術蓄積は、域内外との関係構築の発展をどのように維持し、競争力に結びついているのだろうか。伊丹(1998)は、産業集積が継続し拡大する直接的な理由として、次の二つを挙げている。一つは、需要搬入企業が存在することである。もう一つは、分業集積群が柔軟性を保持することである。なお、ここでいう柔軟性とは、外部の変化していく需要に応え続けられる能力のことを指している。

しかし、「企業撤退」や「事業縮小」が地方に押し寄せ、もはや企業誘致だけに頼ってはいけず、地域経済は成り立たない。諏訪地域のみならず、1985年以降の円高進行、生産拠点の海外移転による、企業経営の方向転換が必至となっている。経済環境がグローバル化し、大企業工場が海外移転するにつれ、需要搬入という役割における大企業のプレゼンスは、徐々に小さくなってきている。実際、産業集積内部にあった大企業工場が撤退することで、その集積への大企業による需要搬入は激減している。既に、大企業は集積の柔軟性維持の中心的役割から外れているのである。集積を維持し発展させるためには、大企業群に代わって他のコミュニティーや企業群が、集積の柔軟性維

持のキーとなる政策や役割を担う必要性が生じている。

こうした情勢の中で、産業、特に工業の活性化を図るためには、知識や技術を高度に集約した製品を開発することが不可欠となっている。

III 目的

今回訪れた、諏訪地域では、現地の「ものづくり」企業の地域経済への関わりと、一つの町の取り組み(本調査では御田町)を通して、地域経済振興策への共通の課題を検証した。少子高齢化など、多くの問題を抱えている地方では、「経済」に関する問題への解決は、地域や町の自立につながるだけでなく、経済活動における従来の固定観念からの脱却によって、個々の判断基準を柔軟にし、地域からグローバルな視点へと繋ぐことができる将来性を含んでいるためである。

IV 調査結果の概要

多くの地方の例では、地域が流動化しなければ活性化せず、再投資も生まれにくい傾向があるが、ここ諏訪地方では、経済活性化を個々のネットワークで乗り切っているという印象が強い。諏訪に立地する企業に対して行った訪問調査の結果から、立地状況について考えると、「株式会社」ではなく、「有限会社」が多い。その背景としては、高い技術を自社の中に蓄積させておくことができるということも大きな要因の1つであるようだ。また、域内だけでなく、他の生産拠点とのネットワーク間取引も存在している。このような産業集積の例は、現在においても、多様なネットワーク形成や公的機関の活動を通じて地域経済活性化を図る上で、地域を支える産業の育成・発展支援、ネットワーク形成の重要性を提示しているといえる。

また、「御田町」の成長は、育て育つ、まちづくりのひとつのカタチとして、御田町という地域ブランドを構築した。地方の商店街の成功事例として語られ、諏訪の「モノづくり」×「町づくり」の丁寧な取り組みの効果が描き出されている。

そこにあるのは、かつて、「合理化」、「費用・労働のコストダウン」、「自動化」といった世界的グローバリゼーションの荒波の下で重視されてきた費用対効果や合理性ではなく、「商店街を賑やかにしたい、盛り上げたい、街を良くしたい」という熱意であるのかもしれない。

御田町の商店街と、技術者(クリエイター)との関係性には学ぶべき所があるだろう。

また、独自の地域空間を地元に着定化させるだけでなく、「空間」(ここでは町そのもの)をスタイルとして売

り出し、定着させるという地域ブランドの創出が、非常に印象的である。御田町のファンを増やしていくという点に、マーケティング・マネジメント手法の双方の戦略が自然に入り込んでいるのが見て取れる。その町そのもののスタイルを楽しむ、つまりは、その町の文化や伝統を楽しむことに商品価値を見出すことは御田町の将来性への大きなファクターとなりうるだろう。工業だけでなく、商圏拡大を目指した匠の町の独自のスタイルは、「諏訪独自」の地域発展のあり方に将来性を含んでいる。

妥協のない職人氣質があり、個々人の知識レベルが非常に高く、グローバル感覚が強い人たちが多くことも「諏訪」の個性だと感じられる。この諏訪独自の地域経済の変化は、今後も注視していく必要があるだろう。

V 結論

地域の自立（地域主権）による「地域経済活性化」の問題は、地域の将来ビジョンであると同時に、あらゆる分野と関連し多くの課題を包含している。また、常にイノベーションを求められる終わりの無い課題でもある。したがって、今回の調査で取り上げた観点は、その一面に過ぎない。地域経済活性化を図るためにはどのような課題が考えられるだろうか。

地方経済のけん引役となるはずの地方自治体は、依然として財政運営の適正化を図ることに加え、産業誘致・育成を通じて増収税を図ることが大きな課題とされる。しかし、大手製造業の海外現地生産は促進され、従来のような企業誘致型の地域経済成長モデルには限界がある。地方は、自地域内の資源を活用した内的成長モデルの確立（中小企業でも世界的に活躍する企業もあり、こうした地域企業を、地域全体で発展させることが重要である。）と、地域の強みや特性など他地域との比較による「個性」を明確し、企業誘致における時代の変化に対応した自治体の戦略的PR作戦の在り方を再考する必要があるのではないと思われる。

「地域主権の確立」、「基礎自治体強化による地域の自立」は、地域住民が自ら考え、自己選択・決定、自助努力、自己責任にもとづき、各地域の個性や強みを活かしながら、住民・地元企業の満足度が高く、かつ周囲からも魅力を感じる活力ある地域を創造するものであり、地方行財政や自治体経営の改革が不可欠である。そして、こうした改革を進めなければ地域経済の活性化は実現しない。換言すると、地域経営のビジネスモデルの構築が必要である。

この地域経営のビジネスモデルは、地方の経済振興に必要なITや外部人材を導入するなど、優れたヒト・モノ・カネ・ナレッジ等が地域内外から「結集」され、それが「定着」し、さらに「再生産」していくような持続性・連続性のあるものでなければならない。これにより、地域への経済的な波及効果も持続的なものとなり、持続可能な地域経済社会の形成への礎となるであろう。地域経済活性化の安定性が確保されるのである。

また、国際社会の中で、各地域が自らの地域をより魅力的なものとするために、各地域の競争と協働・共生によって地域経済活性化に取り組むことが期待される。国際競争の中で、地域ブロック単位で競争していくために、地域政策の重点化・重点投資、地域イノベーションの視点が重要になる。諏訪地域内外において、企業間ネットワークが発達していたように、地域ブロック単位での国際競争を意識した地域インフラ整備・ネットワーク化が必要となっていくであろう。

VI おわりに

地方が生き残りをかけて、競争するのは、悪いことではないと感じる人は少なくないだろう。各地方の部分最適を積み上げても、日本全体の産業政策としてみれば、最適化されたことにはならない。そもそも、優良企業を誘致できる環境をもった地域は限られている。地方自治体は、「右に倣え」ではない独自の産業政策を打ち出すことができるか否かが問われている。

メディアで取り上げられる経済活動の多くは、大手企業のケースに終始していることが多い。しかし、グローバル化で、生き残りをかけた、競合との「差異化」はローカルスケールの中にも存在している。

自治体は外ばかりに目を向けるのではなく、諏訪地域外の企業も進出したいと思えるような、地域特性を活かした新たな企業の環境作りと、地元企業の高度化と育成を図ることが先決であるように思われる。

付記

今回の調査を実施するにあたり、諏訪市役所経済部商工課の宮坂吉郎様、池上宗男様、茅野光徳様、NPO法人匠の町しもすわあきないプロジェクトの原雅廣様、太陽工業(株)の古清水映二様、(株)SUWAオプトロニクスの矢野良一様、宮坂悟様には、ご多忙の中、お時間を頂き、誠にありがとうございました。大変お世話になりました。未筆ながら、心より感謝申し上げます。

文献

- 1) 伊丹敬之・橘川武郎・松島茂編 1998.『産業集積の本質 柔軟な分業・集積の条件』有斐閣
- 2) 佐野聖香 立命館経済学 (第54巻・第1号) 『ブラジル 農業部門の地域集積に関する一考察』
- 3) 財団法人 商工総合研究所 調査研究事業報告書2008. 『諏訪地域の工業集積と地域経済活性化への取り組み』
- 4) 内閣官房都市再生本部事務局 『全国都市再生への新たな萌芽 (第2回) 「平成15年度全国都市再生モデル調査」の実施結果から』
- 5) 山本健児・松橋光治 1999.『中小企業集積地域におけるネットワーク形成－諏訪・岡谷地域の事例』経済志林66.
- 6) WEDGE October 2012. 第24巻・第10号

参照ホームページ

- 1) 株式会社SUWAオプトロニクス.
<http://www.swoptronics.co.jp/index.htm>
(最終閲覧日: 2012年12月25日)
- 2) ㈱東京商工リサーチ.

http://www.tsr-net.co.jp/news/flash/1195743_1588.html
(最終閲覧日: 2012年12月25日)

- 3) 関東経済産業局.
<http://www.kanto.meti.go.jp/tokei/hokoku/data/denshika4.pdf> (最終閲覧日: 2012年12月25日)
- 4) 諏訪精密工業団地.
<http://www.alps.or.jp/daiichi/index.html>
(最終閲覧日: 2012年12月25日)
- 5) 太陽工業株式会社.
<http://www.taiyo-ind.co.jp/index.html>
(最終閲覧日: 2012年12月25日)
- 6) 匠の町しもすわあきないプロジェクト.
<http://takumi.shimosuwa.jp/want/space.html>
(最終閲覧日: 2012年12月25日)
- 7) 御田町スタイル.
http://mitamachi.com/?page_id=60
(最終閲覧日: 2012年12月25日)
- 8) ミリユー (milieu) の意味.
<http://dic.yahoo.co.jp/dsearch/0/0ss/118946600000/>
(最終閲覧日: 2012年12月25日)

上諏訪温泉の現状と課題

榎 由里絵

I はじめに

諏訪地域には、諏訪湖、諏訪大社、温泉、霧ヶ峰、美術館・博物館、多彩なイベント等、他の観光地と比べ多くの観光資源が存在しているのが一つの特徴である。その中でも、温泉施設に訪れる人数が一番多く、次いで霧ヶ峰が多い（平成23年諏訪市観光動態要覧）。そこで、諏訪市の観光業の中でも特に大きな存在となっている温泉産業について調査をすることにした。近年減少傾向に見られる観光客数（平成23年諏訪市観光動態要覧）に対し、その施設ではどのような現状であるのか、どのような考えを持っているのか、また今後の見解や対策を明らかにしたい。

II 方法

事前学習として、諏訪市観光ガイド、諏訪湖温泉旅館組合のホームページを参照し、諏訪市の観光産業の概要を調べ、どのような温泉施設があるかを学んだ。

今回の調査は2012年7月25日から28日にかけて行った。諏訪市役所観光課、社団法人諏訪観光協会、財団法人片倉館、ホテルA、旅館Cに訪問した。

III 諏訪市における観光客数の推移

1. 滞在形態別観光客数

図1は上諏訪温泉における観光客数の推移である。1978年から現在まで、宿泊客数より日帰り客数の方が圧倒的に多いことが読み取れる。1978年と比べると、近年

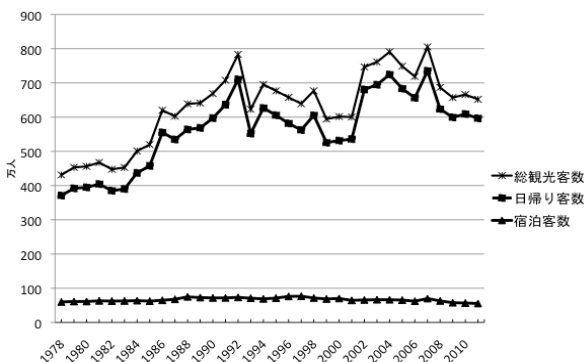


図1 諏訪市における観光客数の推移

（平成23年度諏訪市観光動態より筆者が作成）

における日帰り客数は増加しているが、宿泊客数は横ばいである。日帰り客数が多い要因は首都圏からアクセスしやすいということが考えられる。

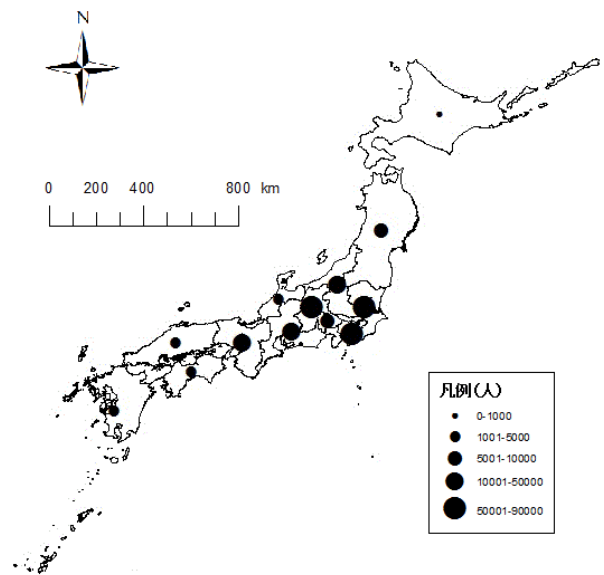
2. 方面別宿泊客数

図2は上諏訪温泉における方面別宿泊客数である。日帰りの観光客が増えたと言っても、首都圏や長野近辺からの宿泊客は全国的に多い傾向にある。それは交通の利便性が高まった首都圏や長野近辺と比べ、九州や北海道等から簡単に来られるところではないことが大きな要因と考えられる。

また、近年では中国を主とした外国人誘致にも積極的であり、中国語で書かれたイベントポスターも町中に掲示されている。その結果、修学旅行生等、宿泊をする外国人観光客は増えているが、未だ宿泊客総数全体の1%に満たない。

IV 上諏訪温泉

1. 財団法人 片倉館



財団法人片倉館は日帰りの入浴施設である。2011年7

図2 上諏訪温泉方面別宿泊客数

（平成23年諏訪市観光動態要覧より筆者が作成）

月に文部科学省より国の重要文化財の指定を受けており、諏訪の一つの観光名所となっている。立って入浴するのが特徴的であり、そのため別名「千人風呂」とも呼ばれている。建物の外観は型にはまらずユニークである。建物の前には噴水を含む大きな庭がある。

利用者については、入浴や施設利用の利用者の地域割合は2009年度において諏訪圏内で41.9%、その他の長野県内で3.9%、県外が54.2%を占める(インタビューより)。

近年では、より多くの方に利用をしてもらうために会員券を発行し、安く入浴ができるように工夫をしている。これはリピーターが多いことも反映している。また他の企業等とも協力をし、観光客向けに割引券や無料券を配布している。

2. 諏訪湖温泉旅館組合

諏訪湖温泉旅館組合は諏訪の観光の活性化のために設立された組織である。上諏訪にある50軒のうち24軒の旅館やホテルが所属している(2012年7月現在)。宿泊予約をはじめ、シンポジウムや各種イベントを行っている。理事長は代々その組合に所属する旅館やホテルの社長や取締役が務めることが多い。現在は後述のホテルAの社長が務めている。

以下より、諏訪湖温泉旅館組合に所属する旅館を紹介していく。いずれも諏訪湖畔に立地している。

1) ホテルA

- ・室数は55室、収容人数は205名であり、上諏訪温泉の中では大規模である。

- ・諏訪湖畔では初の宿泊施設である。

- ・客層についてはシニア層が一番多く、次いでカップルや家族客、修学旅行等の団体客が多い。方面別に見ると、地元からの利用客も多く、3割弱が県内の利用客(婚礼や接待が多い)で、首都圏が3割を占める。海外からの利用客は1%未満である。

- ・豊富な宿泊プランがある。具体的には、カップル向けの露天風呂付き客室プランや、幼い子どもを持つ家族用のプラン、三世代家族のためのプラン等がある。会食プランも豊富である。また、他の企業と提携をし、酒蔵巡りプランや、スイーツプラン、諏訪湖満喫プランもある。

今後は、諏訪市には多くのホテル・旅館が存在するが、競争関係はなく、互いに協力して諏訪をより活性化させたいという。しかし、近年観光客が減少傾向にある上、日本全体の人口が減り、利用客も更に減ってしまうのではないかと危惧しているという。

2) 旅館C

- ・室数は26室、収容人数は119名である。

- ・客層については家族客が中心でカップルや団体客はそれほど多くない。婚礼や接待で利用する人もいる。6割が首都圏からの利用で1割が県内からの利用者である。また海外からの利用者は少なく、1%未満である。東日本大震災以前は毎年夏に行われる花火大会のために旅館を利用するというリピーターも多く存在していたが、震災後は少なくなってしまったということである。宿泊客数の割合は日帰り客数の約5倍である。

旅館Cは温泉旅館が多く建ち並ぶ立地にあり、近くの温泉旅館の関係者とも幼い時から多く交流があるという。しかし、それは決して競争関係があるという訳ではなく、お互いに協力しており、より諏訪を活性化させたいということであった。

V おわりに

以上のことから、近年の観光客数の減少に悩まされつつも、温泉産業の枠内だけでなくそれ以外の諏訪の多くの方々が工夫を凝らし、諏訪全体をアピールしていきたいということである。また、企業の方々と接していると「お客さんが満足できるように」という気持ちが一番であるということが伝わった。地元住民の方も快く歓迎していただき、観光産業に直接関わりのない方々でもそのように対応してくれるという嬉しさを感じた。地元住民も一体となり諏訪の魅力を引き出している。このことこそが観光にとって一番大事であると感じる。

今後は外国人観光客のシェアが増えていくと予想される。しかし、外国人の多い東京と比べ、町中に見られる外国語は少ないように感じた。今後より多くの企業が外国人観光客を迎え入れる対策を施し、行政が海外へのアピールを重ねれば、諏訪の温泉産業をはじめ、観光産業はより発展していくことであろう。

謝辞

報告書を作成するにあたり、諏訪市役所、諏訪観光協会の方々、財団法人片倉館、ホテルA、旅館C、温泉旅館の関係者の方々にはインタビューをはじめ資料の提供等で大変お世話になりました。ありがとうございました。

文献

諏訪市観光課 2011. 平成23年観光動態要覧

諏訪湖温泉旅館協同組合 1997. 諏訪湖温泉旅館協同組

合30周年記念誌

神頭広好・麻生憲一・井出明・廣田政一2010. 『観光
と産業のまちづくりー主に諏訪・岡谷を対象にしてー
』愛知大学経営総合科学研究所叢書35

諏訪市観光ガイド <http://www.suwakanko.jp/>

(最終閲覧日:2012年12月10日)

諏訪湖温泉旅館組合

<http://www.suwako-onsen.com/>

(最終閲覧日:2012年12月10日)

財団法人片倉館

<http://www.katakurakan.or.jp/index.php>

(最終閲覧日:2012年12月10日)

霧ヶ峰の魅力を活かすエコツーリズム

秦 沙紀

I はじめに

交通の利便性が良くなり、多くの人々は旅行をするようになった。現在観光産業は、地域経済の発展のための重要な手段として多くの地域で注目されている。

地域固有の資源を保護するとともに観光業にも活用し、地域振興を目指す取り組みの一つがエコツーリズムである。各地域の実情に即する形で実施していく必要があると考えられるため、現在行われている取り組みを調査し、そこからより良いエコツーリズムの形を検討することを試みる。本調査では、国の天然記念物に指定される3つの湿原や貴重な高原植物を有する長野県霧ヶ峰地域を対象とし、エコツーリズムの実施について調査を行った。

II 調査結果

1. 調査方法

事前に自然保護に関する文献(古谷 2001; 諏訪市教育委員会 1971)などを調べた上で、2012年7月25日から7月28日にかけて霧ヶ峰を訪問し、霧ヶ峰の観光・自然保護に関わりを持つ方々にインタビューを行った。具体的には、諏訪市役所観光課・生活環境課の職員の方、長野県霧ヶ峰自然保護センター職員小松さん、霧ヶ峰自然保護指導員の方、下諏訪町八島ビジターセンター職員田口さんにお話を伺った。

2. 調査地概要

霧ヶ峰高原は長野県中部、八ヶ岳中信高原国定公園の

中央にあり、マリアナ・富士火山帯の一部である八ヶ岳火山列の北西延長部に展開する八子ヶ峰・霧ヶ峰火山列に位置している。粘度の低い熔岩が噴出して形成されたアスピーテ型火山であり、北西から南東に向かってゆるやかな傾斜をもつ標高1500-2000mの平坦な溶岩台地である(諏訪教育会 1982)。

霧ヶ峰は諏訪市・下諏訪町・茅野市と3つの行政区分にまたがっており、天然記念物に指定されている3つの湿原や原生的な樹林としての樹叢、周辺集落の人々が採草地として利用してきたことにより維持されてきた半自然草原が見られる。

国の天然記念物に指定されているのは、八島ヶ原湿原・車山湿原・踊場湿原の3つの湿原である。植生学でいう湿原とは、低温・過湿のために枯死したミズゴケが分解されず泥炭となり、水を含んで過湿となった場所のことを示し、湿原の発達過程から低層湿原・中間湿原・高層湿原の3つの段階に分けられる。発達段階は低層から高層へと移行していき、霧ヶ峰の3湿原は発達の最終段階である高層湿原に分類されている。八島ヶ原湿原の泥炭は霧ヶ峰湿原中では最も発達しており、8.5mほどの泥炭層がある。泥炭は1mm堆積するのに約1年かかるため、八島ヶ原湿原は約1万年かけて現在の姿になったとされている。生態系形(高層湿原という特殊環境に適応するために単に変形したもの)にしても、間種にしても、霧ヶ峰に特殊なものが多くあることは事実であり、そう広くない地域に1000種からの種、亜種、品種があること、大群落が見られることは植物学上貴重なこととされている。そのため、明治

時代から着目され研究が行われ、保存されるに至った経緯がある（諏訪市教育委員会 1971）。

霧ヶ峰の一つの景観を成している草原地帯は夏緑広葉樹林帯上部から亜高山帯に成立し、採草地として地域の人々に利用されることで維持されてきた半自然草原である。特に江戸時代には周辺集落の農耕用牛馬の飼料や田畑の肥料としての需要が高まり、全山に渡る本格的な採草が行われていた。採草と草の生産能力を維持するために火入れを行うことで独自の植生を形成してきた霧ヶ峰の半自然草原だが、昭和32年頃に境に農業の経営は急速に役牛馬から動力耕運機に変わり、以後年々耕地整理の進展と共に牛馬の数は減少し、霧ヶ峰放牧場も経営難から閉鎖となり、また化学肥料の普及等から採草地としての利用も少なくなっていく（諏訪市教育委員会 1971）。

3. エコツーリズムに関して

II に述べたように、霧ヶ峰地域は貴重な自然資源を持っている。観光資源としての利用も活発に行われており、環境保全と観光利用を持続的に運営していく取り組みが試みられている。

1) 草原の森林化に対する取り組み

採草地としての利用が減り、草が刈り取られず養分が蓄積していくことで、草原は年月をかけて森林化していく状況にある。森林化は植生の遷移の形ではあるが、長い年月をかけて維持してきた霧ヶ峰高原の姿を今後も保っていこうということで、雑木処理や火入れの活動が行われている。雑木処理は樹木を伐採し、森林化をくい止め草原の景観を保つことを目的としている。ススキなどが繁茂するとその下の植物に日光が当たらなくなり生育を妨げてしまうため、それらの地表を覆う枯れ草に火入れを行うことで、2,3年は多様な植物が育つようになる。また、火入れは地中に埋まっている草花の種の発芽を促す効果や、低木の生育を妨げる狙いもある（霧ヶ峰自然環境保全協議会 2009）。

これらの活動は諏訪市生活環境課や関係団体等が協力して実施している。活動の際には靴を洗うことや道具の泥を落とすことで外来植物の種子を持ち込まないようにということをアナウンスし、なるべく在来植生に影響を与えないようにする工夫も行われている。取り組みの成果については検討中であり、今後の方針等は様子を見ている状況である。

2) シカの食害に対する取り組み

霧ヶ峰においてニホンジカの食害（以後、シカの食害）が目立つようになったのはここ最近のようである。小松さんによると、丹沢や南アルプスの南の方でシカの食害対策がとられた影響で、霧ヶ峰に移動してきたのではないということである。夏の霧ヶ峰高原の代表的な花としてあげられるニッコウキスゲがシカの食害にあっているため、観光面から大きな問題となっている。ニッコウキスゲはユリ科の高山植物であり、ラッパ状のあざやかな黄色い花は朝方に開花し夕方にはしぼむ一日花である。ニッコウキスゲはシカの食害にあい、芽や花を食べられても根が5,6年持つため、翌年また芽吹くことができる。そのため、ニッコウキスゲがシカによる食害で食べ尽くされ、根が傷み育たなくなる状態までシカによる被害に気付かなかったという。シカによる被害に気付いた時には既にシカは増えてしまっていた。

主な対策としては、電気柵の設置が行われている。電気柵に触れると瞬間的に信号を発信し、5000-7000Vの電流が流れる。電気柵にはバッテリーが付けてあり、利用電気は太陽パネルでまかなっている。電気柵の設置方法も改善が加えられるようになり、2011年からはニッコウキスゲを円形に囲うという方法が実施されるようになった。電気柵は車山肩などに設置され、囲われた範囲のニッコウキスゲの花芽等を保護し、花のシーズンが終わると取り外される。一方で、国の天然記念物に指定されている八島ヶ原湿原の周囲には、2010年、2011年にかけて1.8m程の鉄製の防鹿柵が湿原を大きく囲うように設置された。八島ヶ原湿原の下諏訪町の範囲は国有地であり、シカ対策の柵の設置は植生を護るためだけでなく、文化財を護るという意味合いがこめられている。八島ヶ原湿原の防鹿柵は常に設置されたままであり、シカの侵入を防ぐ効果が見られているが、木道などを通り柵内に入るための扉を閉め忘れるケースが多く見られ、シカが湿原内に侵入してしまったこともあったようである。

電気柵を設置したことで一定の植物を保護することが可能となったが、一方で問題も発生している。電気柵に草がふれると電圧が低下しシカが柵内に入る可能性があるため、柵付近の草刈りを週1,2回行う必要がある。草刈りの影響で裸地化する可能性があり、さらに外来種侵入の可能性も出てくる。また、柵沿いに草を刈っていると、観光客が入り込むことも多いという。柵付近とは対照的に電気柵の外側は花が極端に少なくなり、観光客が電気柵の周囲に集中している現状もあるようである。多くの人が集中すると土を踏み固め植生を痛めてしまうことや、ビーナスラインにおける渋滞に繋がることもあるという。

半自然草原域に主に分布するニッコウキスゲは、草刈りをする以前の霧ヶ峰には咲いていなかったとされている。人間が採草のための草刈りをする事でニッコウキスゲに適した環境となり、採草をしなくなったことで森林化が進み、シカがやってくるようになった。結果、観光客を集めるために、ニッコウキスゲを保護しシカを排除する対策をとるようになった。霧ヶ峰におけるシカの食害は、人が自然に深く関与したことで生じた事態といえるだろう。現時点においては、電気柵の他に簡単に実施できるシカ対策がないということだが、今後ともシカの食害への対策と観光資源の保護に向けてよりよい対策を検討していく必要がある。

3) 設備の整備

霧ヶ峰を訪れた人に対して、自然保護を踏まえた行動をしてもらうための様々な設備が整備されている。たとえば、人が集中する地区の遊歩道沿いに柵を設置することで、裸地化や植生破壊に対処している。また、八島ヶ原湿原の周囲には、湿原を大きく囲うように木道が設置されており、板の交換など整備が行われている。新たな外来植物の侵入を防ぐ対策としては靴底付着物除去マットがあり、人が良く通る霧ヶ峰の入口に設置されている。車山肩ではバイオトイレの設置も行われた。これらに関して霧ヶ峰全域には、自然に負担をかけないような行動を呼びかける看板が設置されている。

4) 自然保護と観光に関する団体

霧ヶ峰には、霧ヶ峰自然保護センター(長野県の直営)、八島ビジターセンター(下諏訪町)、車山ビジターセンター(信州総合開発観光株式会社)、という3つビジターセンターがある。訪れた人に霧ヶ峰の魅力を伝えと共に、環境保全などに関して、3つのセンターが協力し霧ヶ峰ビジターセンター連絡会を作り、情報の共有などを行っている。諏訪市においては、諏訪市教育委員会の委託を受けて、実際に看板の設置や木道の整備等を行う霧ヶ峰自然保護指導員という大学生を中心とした団体が活動している。

霧ヶ峰地域では、霧ヶ峰に関係する団体の代表者が霧ヶ峰の保護と利用のあり方について意見を交換する場として霧ヶ峰自然環境保全協議会を創設し、地域として問題を考えていこうという姿勢を持っている。協議会の構成団体としては、地権者、自治会、観光、運輸、霧ヶ峰の自然保護と関わり深い市民団体等、学識経験、行政などの38団体となっている。霧ヶ峰自然環境保全協議会は年間2回行われ、要望や問題点を話し合い情報の共有を行う。

4. 自然と観光の調和への活動

1) 自然解説員“インタープリター”

ビジターセンターにおいては、インタープリターとともに自然を見てまわるガイドウォークが実施されている。インタープリターは自然解説員と訳されることが多いが、基本的に自然と人間を繋ぐ役割を持っている。解説員と言っても植物などの知識を解説するというのではなく、訪れた人に自然と向き合ってもらう場を提供する存在である。自然保護を踏まえた行動を求める際に、行動に対して禁止や規制などを与えるのではなく、自然にふれあい自然を好きになってもらい、自ら自然を護りたいという気持ちに至る必要があるのではないかと。このような考えから自然により近くふれあい、内部から自発的に自然を護りたいと思ってもらおうという活動が霧ヶ峰インタープリターである。

2) 霧ヶ峰エコツーリズムの姿

霧ヶ峰においては、エコツーリズムの実施にあたり大きく分けて2つの試みが行われている。1つ目は、電気柵の設置や自然保護を呼びかける運動など、自然の破壊を少なくし、現状を維持していこうという対処療法的な試みである。2つ目は、インタープリターによって訪れた人の気持ちに働きかける、環境教育を含んだ原因療法的な試みである。どちらもエコツーリズムの実施に重要となるものである。地域の人々による霧ヶ峰自然環境保全協議会やビジターセンター連絡会を通して、地元主体の地域振興が試みられている。

Ⅲ 考察

今回は、霧ヶ峰において自然保護活動がどのように行われているのか、調査を行った。霧ヶ峰自然環境保全協議会など協力体制を整え、観光と自然保護を両立させていくという方針が地域の共通意識としてあるようだった。一方で、外部との関わりはどのようになっているのだろうか。訪れる観光客への情報の提供などがまだ不十分であり、課題となる点もあると考えられる。観光地として人が多く訪れるようになると、自然環境への負荷はさげられないが、負荷を最小限にとどめようという努力を、地域側も観光客側も持たなければいけないだろう。そこで重要となるのが、訪れる人々への霧ヶ峰の自然に関する情報提供や、注意すべき行動などを伝える手段である。インタープリターによる環境教育は、自然を楽しみながら自分自身の環境観を形成するのに役立つ。インタープリタ

一の活動には、今後のエコツーリズムの実施に変化を与える大きな可能性を感じた。

豊かな霧ヶ峰の自然を維持しながら、観光として成り立たせていくためにはニッコウキスゲ等特定の観光資源に頼らず、幅広い霧ヶ峰の魅力をより多くの人に知ってもらうことが必要となる。今回の現地調査で、すぐ近くに広い無料の駐車場がある車山肩を訪れた。駐車場から歩いてすぐのところに電気柵に囲われ咲くニッコウキスゲの区画があり、周囲には多くの人が集まっていた。なだらかな丘陵地に突如駐車場があり、バスや自動車が多く停車する姿、花の周囲に人が押し寄せる様子は、霧ヶ峰の自然を観光してもらう理想の姿だろうか。現在は駐車場なども無料であるが、有料にしたら観光客が減少するのではないかとする一方、有料化することで地域の経済が潤いよりよい観光につなげていけるという考え方もある。ただ多くの観光客を集めるようなものではなく、わずかでも自然への意識や配慮、山に入るとい自分自身の行動が環境にどのような影響を与えるのか、その意味について考えるような機会を持てるように、宣伝していく必要があるのではないか。

謝辞

今回の調査を行うにあたり、長野県霧ヶ峰自然保護セ

ンター職員の小松様、下諏訪町八島ビジターセンター職員の田口様、諏訪市役所の皆様をはじめとして、多くの方々にご協力いただきました。末筆ながら、厚く御礼申し上げます。

文献

- 霧ヶ峰自然環境保全協議会 2009.『歩いてあじわう霧ヶ峰 霧ヶ峰ハンドブック』
- 小島居伸介2011. エコツーリズムの理想と現実-保護と開発の両立を求めて-. 長崎外大論叢15, 15-28.
- 諏訪教育会 1982.『諏訪の自然誌 陸水編』
- 諏訪市教育委員会 1971.『霧ヶ峰の植物』
- 諏訪市教育委員会霧ヶ峰自然保護指導員 2011.『諏訪市教育委員会 霧ヶ峰自然保護指導員活動報告書』 諏訪市
- 辻井達一 1987.『湿原 成長する大地』中公新書
- 新田次郎 1970.『霧の子孫たち』文芸春秋
- 古谷勝則・油井正昭・赤坂信・多田充・大畑崇 2001. マイカー規制のもたらす自然公園利用の諸問題. 千葉大園学報 55, 21-41.

諏訪圏における観光スポットの連携

秦 朝弓

I はじめに

長野県諏訪地域は既に、山下(2001:135-145)の諏訪湖畔における観光資源の研究によって、「『諏訪湖』というシンボルで結ばれた各市町が、地域性を活かし、欠如する点を補完しあいながら、より魅力的な広域観光圏を形成しようとしている」という指摘がなされている。具体的には、諏訪湖周辺の六市町村では諏訪広域連合を結成し、共同で観光客誘致を行うようになった。各市町村が独自に行うときに比べ、広域連合は観光客にアピール出来る要素を増やす。さらに、同論文内では「各観光施設間を結ぶ交通面、情報面におけるネットワークの整備」(山下2001:144-145)という課題が指摘している。

山下(2001)の調査から10年余り経った現在、交通面や情報面における市町村間、観光施設間のネットワークはどのように変化したのだろうか。本調査では、山下(2001)の調査結果を基礎として諏訪地域の現在の観光における取り組みの成果と課題を洗い出した。

そして、行政側の取り組みとして市町役場、各観光協会の他、温泉旅館や観光施設に訪問し、現在の課題について聞き取りを行った。特に、訪問時に「諏訪の長い夜」というイベントが実施されたため、参加者の観察や聞き取り調査を通じて考えていくことにした。

II 諏訪の課題

まず始めに、諏訪地域の観光における現状と課題を挙げ

る。

1. 諏訪圏という考え方

山下（2001）にあるように、諏訪地方では六市町村が共同で観光客誘致を図ろうとしている。

平成9年に諏訪地方連絡協議会が設けられ、平成16年には発展して諏訪地方観光連盟が設立された。これまでは各市町村単位で行っていた誘致政策を「諏訪圏」という一つの観光圏として捉えることで、個々の市町村単独では持てなかった観光要素を持つことが出来たのである。その例として諏訪市における八ヶ岳、下諏訪町における団体客受け入れ可能な宿泊施設が挙げられる。

美術館・博物館も例外ではない。諏訪湖周にある16の文化施設が「SUWAKOアートリング」を結成し、イベントを実施している。その最大規模のものが「諏訪湖まちじゅう芸術祭」であり、そのオープニングイベントが、筆者の体験した「諏訪の長い夜」である。詳しくは後述する。

2. 点在する観光スポット

諏訪圏における魅力的な観光資源の多さは、市町村間、観光施設間の結束力の弱さを露呈する。各組合や各施設単位での誘致が活発になり、諏訪圏としてのまとまりが薄れている。その結果、観光客にとって分かりにくいものが出来上がっている。さらに、諏訪圏に到着した後の交通手段、いわゆる二次交通が不足している。

山下（2001）で指摘された交通手段の不足は、その後コミュニティバスの運行により多少改善された。なぜならば、2003年7月に諏訪湖を周遊するスワンバス、2008年に下諏訪町のコミュニティバスであるあざみ号が運行を始めたからである。しかし運行本数は少なく、場所によっては、コミュニティバスよりも徒歩の方が早く目的地に到着する場合もあった。

3. 通過型観光

諏訪圏の観光における課題として、日帰り客の多さが挙げられる。諏訪市においては温泉旅館が湖畔に軒を連ねるため、「滞在型」観光であるとの指摘もある（山下、2001）。

しかし諏訪市内だけで、観光客は約652万人いるのに対し、宿泊客は55万人程度に留まっている（諏訪市観光課

『平成23年観光動態要覧』）。これは、諏訪圏の観光客のうち長野県内や首都圏からの観光客の占める割合が高く、日帰りで諏訪圏を訪問することが可能だからであろう。

通過型観光のデメリットとして、地元経済に対する還元が少なくなることが挙げられる。特に下諏訪町では通過型観光の傾向が顕著である。大きな旅館が1軒だけしかなく、団体客はバスで諏訪大社に寄り、付近の土産物店を訪問して帰ってしまう。日帰り客は目的地を訪問し、休憩で土産物店や喫茶店に立ち寄る程度になってしまうのに対し、宿泊客は土地に滞在することで宿泊費や飲食代が地元の観光施設に流れ、地域経済を活性化させるのである。

4. まとめ

諏訪圏の観光の現状として、霧ヶ峰や諏訪大社など1地点の観光や、旅館に宿泊など、観光客が諏訪で過ごす範囲は狭い。魅力ある観光施設が多いのに、アクセスが困難な場所も多い。

Ⅲ 観光スポット間の連携

この点在している観光施設を周遊させる仕組みを作ることで、滞在時間を延ばそうとする取り組みが諏訪圏では行われるようになった。「万治の食べ歩き」はシール5枚を500円で購入し、地元商店街でシールの枚数に応じたサービスを受けられるシステムである。例えば、シール1枚（100円相当）で自転車を1時間借りたり、商品購入時にシール1枚100円として利用出来たりする。下諏訪駅から諏訪大社下社秋宮・春宮に続く通り沿いにある



図1 万治の食べ歩き MAP

（万治の石仏ホームページより）

る27の店舗・施設が参加しているため、地元の商店や施

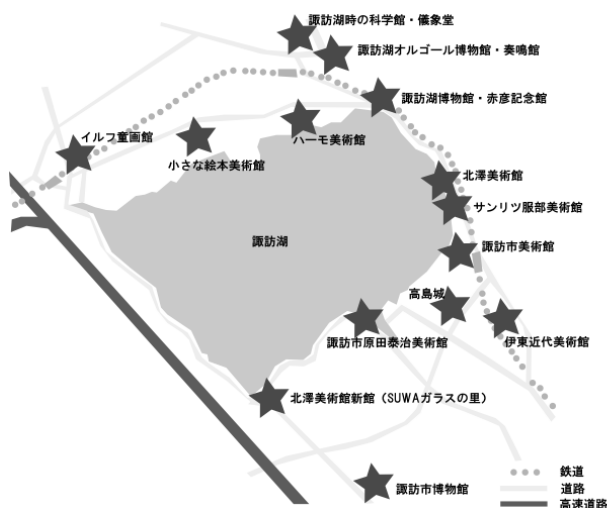


図 2 諏訪圏の美術館・博物館地図

(諏訪湖まちじゅう芸術祭2012ホームページを元に作成)

設に立ち寄るきっかけ作りとして機能している。

また、万治の石仏の関連商品を紹介する欄もあり、それらを販売する各店舗の宣伝にもなっている。

「あるき太郎プロジェクト」は岡谷市出身の童画家である武井武雄の作品から由来している。全長4～6キロメートルのコースを4種類用意し、岡谷駅出口に大きな地図が掲示されている他、岡谷市のホームページからダウンロード出来るようになっている。中でも「絲まち回廊」は岡谷市の誇る近代化産業遺産のスポットを繋いだウォーキングコースで、各遺産には歴史やエピソードなどを開設したスタンドサインが設置されている。

「あるき太郎プロジェクト」の地図を持って歩いていた観光客に話を伺うと、コースの中には住宅地が組み込まれており、入り組んだ道が分かりにくいという声が聞かれた。実際に筆者もコースの一部を歩いてみたが、道を間違え、立ち寄るはずのスポットを一つ飛ばしてしまった。これを分かりやすくすることが今後必要であろう。コース内に坂道が多いのも特徴であり、ジョギングをしている地元の方も見かけた。

2. イベント「諏訪の長い夜」

「諏訪の長い夜」というイベントは、諏訪湖周まちじゅう芸術祭2012のオープニングイベントとして、7月27日から29日にかけて行われたイベントである。パンフレットによると「諏訪湖畔に点在する14の美術館・博物館が夜間まで公開され、共通のパスポートで自由にシャトルバスに乗り、周遊できる文化イベント」とされている。諏訪湖畔には15の美術館・博物館が点在している(図2)。改装に伴い休館中の岡谷蚕糸博物館・岡谷美術考古館を

除いた、諏訪圏内全ての美術館・博物館が参加しているイベントである。3日間共通パスポートは、前売りで大人2000円、小中高生500円と設定されている。通常1館あたり800円以上するので相当安い。採算を度外視しているのは、このイベントをきっかけに各館を気に入ってリピーターとして再度訪問してもらうこと、あるいはイベントに参加した観光客が地元に戻って口コミで広げてくれることを期待している、と諏訪市観光課の担当者が語った。

交通面においては、期間中、シャトルバスが約1時間半間隔で運行されていた。1館を1時間弱で回る計算である。つまり、シャトルバスのみを利用すると1日に7館程度しか回れず、全館を回りたい観光客は2日以上旅行計画を立てるようになる。即ち、滞在するという選択肢が生まれるのである。このように、美術館・博物館という観光施設を繋いでいくこと、シャトルバスというアクセスの手段を明示することで、利用者の利便性は向上し、かつ滞在型観光へと促していた。なおかつ美術館・博物館にテーマを絞ることで、芸術に興味のある観光客を呼び込むことに成功していると言えるだろう。

IV 考察

山下(2001)の調査時点に比べ、諏訪圏の観光アクセスは大きく改善されているといえるだろう。

市町村財政の都合上、道路の整備や新規のバスルートの確保などは厳しい状況であるから、抜本的な交通面の改善は厳しい現状である。しかしながら、コミュニティバスの運行が始まるなど10年を経て改善は進んでいる。一方で、町歩きマップの作成や周遊イベントの実施など低予算でも出来ることから始めて工夫する姿勢が、行政や地元商店、旅館から見えた。特に諏訪湖まちじゅう芸術祭の実施は、諏訪圏の美術館・博物館の存在を再認識させ、特別企画展の実施やシャトルバスの運行、共通パスポートの発行によって来場を促すことが出来ている。

「諏訪の長い夜」は施設が夜遅くまで開館しているというイベントの特性もあり、自ずと諏訪圏に滞在して施設を巡る観光客が多かった。滞在型観光を促す性質を持ったイベントであると言える。

また、「諏訪の長い夜」の参加者の話を聞くと、諏訪圏の住民の方も多く、地元住民が地元の美術館・博物館を知るきっかけ作りの一面を担っていた。

しかしながら、一部の施設では特別展の実施がなされていなかったり、「諏訪の長い夜」の最終日は展示品入れ替えのための休館とする施設もあったりと、足並みの揃

いは完全とは言えない。民間が連携して一つのイベントを実施するのは困難ではあるが、観光客をより誘致し、イベント自体をより活性化させることで、足並みが揃って来るだろう。

V 終わりに

4泊5日の諏訪大巡検の最初は、役所の観光課や温泉旅館、観光協会を中心に回っていた。その中で、行政と民間が一体となって諏訪圏を盛り上げていこうとする心意気が伝わり、「諏訪の長い夜」イベント期間中の夜に上がる打ち上げ花火について熱く語って頂いた。滞在4日目に実際に打ち上げ花火を筆者も見て、迫力のある音に圧倒された。

今回、滞在中に岡谷市の「まちあるき太郎プロジェクト」に関心を持ち、実際に街歩きをすることに時間を割いてしまったために、岡谷市の行政側の話を聞きに行くことが出来なかった。また、諏訪市・下諏訪町・岡谷市以外の市町村のプロジェクトに関して触れることが出来なかった。しかしながら、諏訪圏を初めて訪問し、地元

の方々や観光客と関わる中で諏訪圏の魅力が見え、非常に有意義であった。

文献

- 下諏訪町観光振興局『信州しもすわ 万治の食べ歩きPart2』
諏訪湖周まちじゅう芸術祭実行委員会事務局（2012）『諏訪湖周
まちじゅう芸術祭2012』パンフレット
山下亜紀郎（2001）『諏訪湖畔における観光資源の多様性と
地域間提携』地域調査報告23, 135-145
岡谷市「あるき太郎プロジェクト」
<http://www.city.okaya.lg.jp/okayasypher/www/service/detail.jsp?id=5805> （2012年7月31日閲覧）
諏訪湖まちじゅう芸術祭ホームページ
<http://suwako-art.jp/index.html> （2012年10月5日閲覧）
万治の石仏ホームページ
<http://www.manji-sekibutsu.com/> （2012年11月18日閲覧）

地域文化と住民

～諏訪大社の御柱祭と住民～

佐伯 英恵・中嶋 悠紀・小川 杏子・趙 燿虹

I はじめに

今回の巡検にあたり、私たちのグループは「諏訪大社」をキーワードに各自テーマを設定し、調査に臨んだ。しかし、実際に調査を進めていくと、短期間のインタビュー調査の限界や先行研究がない問題の存在という壁にぶつかった。この経験は、調査やその計画の難しさを、さらには実際に現地に行くまでは見えてこない面が多くあることを気づかせてくれた。例えば今回のレポートで中心的論題となっている御柱祭をめぐる住民の意識の多様性である。

私たちは今回、現地に行ったことで得た気づきや知識を重視し、第1に住民意識の多様性の点から、第2に御柱祭の近年の変化の2点から論じていく。

II 調査方法および調査地

調査方法は、先行研究及び資料による調査と現地での聞き取り調査およびインタビュー調査である。

聞き取り調査に関しては、御柱祭についてや諏訪地域の歴史や風俗に通じている神社や博物館を中心にお話を伺うこととした。これらの訪問先には事前にアポイントメントを取り、インタビュー内容を送付させていただいた上でお話を伺った。インタビュー調査は、一般の住民の方のお話を伺うためであり、日常生活で地元の人々に利用されている上諏訪温泉諏訪市総合福祉センター湯小路いきいき元気館にて行うこととした。さらに、現地で調査を進める中で、下諏訪町での住民の方へのインタビュー調査が必要となり、下諏訪駅および下社秋宮周辺でもインタビュー調査を行った。なお、このインタビューは事前にアポイントメントを取ってのものではなく、その場で了承をとり行った。

Ⅲ 諏訪大社

諏訪大社は長野県諏訪湖の周辺に4つの境内を持つ神社である。諏訪大社上社は諏訪湖南部に位置し、本宮と前宮にわかれている。本宮は諏訪市に、前宮は茅野市に属している。諏訪湖北部にある諏訪大社下社は、春宮と秋宮から成り、下諏訪町に属する¹⁾。

また、関係の摂末社は60 有余を数え、郡内全域に分散し、さらには全国各地におよそ1 万社ある諏訪神社の総本社であり、国内で最も古い神社の一つとされている。

Ⅳ 御柱祭について

1. 御柱祭とは

諏訪大社の御柱祭とは、7 年ごとの寅と申の年に宝殿を新築し、社殿の四隅にあるモミの太木を建て替える祭りである。この祭りは「式年造営御柱大祭」、通称「御柱祭」と呼ばれ、諏訪地方の6 市町村約21 万人の人々が参加する大祭である。

御柱祭では長さ約17 メートル、直径1 メートルあまり、重さ10 トンを超える巨木を使用し、それを全て人力で運ぶ。この木を山から里へ曳き出す「山出し」、街中を通って柱を曳行し、最終的に柱を各社殿に建てる「里引き」が上社、下社それぞれで行われる。

御柱祭の行われた年の秋には、「小宮の御柱」と呼ばれる祭りが諏訪全域で行われる。小宮とは諏訪6 市町村の各地区にある諏訪大社ゆかりの神社、直接縁故のない神社などである。諏訪大社の御柱祭に比べると規模は小さいが、子供からお年寄りまで参加して盛り上がる。

御柱の起源や変容については4 - 4で詳しく述べるが、平安初期の桓武天皇(781~806年)の時代にはこの祭りがすでに行われていたという記録がある²⁾。御柱を建てる理由に関しては諸説あるが³⁾、諏訪地方に残る伝承では、社殿造営の代替のためと考えられている⁴⁾。

2. 上社と下社の御柱祭

上社と下社の御柱祭の流れについては図2を参照していただき、詳細は省略したい。ここでは両社の御柱祭の違いに重点を当てて述べる。

上社の御柱祭と下社の御柱祭には大きく分けて四つの違いがある。

まず第1に曳行分担の決定方法の違いである。上社では、分担

された八つの地区の大総代らが御柱年の2月15日にくじを引いて担当する柱を決定する。氏子の間では一番太い本宮一の柱を曳くことが荣誉とされているので、その柱を曳き当てられるように、抽籤の直前になると毎日上社に願かけに通う人もいるほどである。一方の下社では抽籤ではなく事前に決められた担当に従って御柱祭が行われる。このため、下諏訪御柱実行委員会という組織が作られ、そこを中心として日程などの全体のとりまとめが行われる⁵⁾。また、御柱年になると下社では「曳行(えいこう) 分担決定奉告祭」という神事が行われ、神楽殿に神職や大総代が集まり担当の再確認と神前への報告が行われる。このような背景があり御柱祭の際には、下社では下諏訪全体でまとまって祭りを運営していく⁶⁾が、上社ではそれぞれの地区ごとにまとまるため、全体としてのつながりよりも地域ごとの絆が深まるという違いも見られる。

第2に、御柱祭までの工程の違いである。特に仮見立てから伐採までの行程に関しては、1年のずれがある。それにより、御柱自身にも違いがあり、上社は山出し直前に伐採するために皮をはがらないのが一般的であったが⁷⁾、下社では山出し前に皮をはぎ、雪が降る前の10月末ごろ行われる仮搬出によって、棚木場(たなこば)と呼ばれる山出しの開始地点に移動するのが慣例となっている。また、伐採の際に使用する用具および儀式も異なる。上社では火入れ式が行われ、伐採器具が火で清められるが、下社では伐採の前には森の入口の斧立社(よきたてしゃ)で伐採に使う用具を清めてお祓いを受けた後に斧入れが行われ、伐採が行われる⁸⁾。

第3に、御柱祭の工程の違いである。上社では山出し、里曳き、建て御柱がそれぞれ下社より早い日程で行われ里曳き、建て御

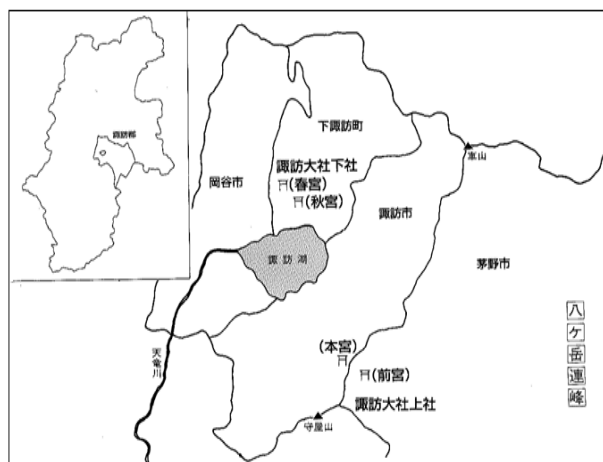


図1 諏訪大社上社・下社の位置

(出典：諏訪市博物館『御柱とともに』)

表1 上社と下社の違い

	上社	下社
御柱を伐採してくる場所	御小屋山(社有林)	東俣国有林
伐採の時期	御柱年内	御柱年前年
伐採用具の清め方	火を使う(火入れ式)	無事祈願の際に用具を供える
曳行する柱の決め方	抽選	古例によって決定済
山出し	木落とし坂の他、川越し	木落とし坂
柱の皮を剥ぐタイミング	山出し後	山出し前
御柱の装飾	メドデコ	大御幣
住民のまとまり	地区ごとのまとまりが強い	諏訪地域全体がまとまる

柱がそれぞれ下社より早い日程で行われる。上社の山出しでは御柱綱置き場まで曳きそろえられた御柱を、本宮一の柱から順に御柱屋敷⁹⁾まで曳行する。山出しの途中には、坂を下る木落としと宮川の川越しがある。この場面が上社の御柱祭の一つのクライマックスである。一方下社の山出しは、棚木場からシメ掛けまで、春宮一の柱を先頭に曳行するものであり、最大の難所で最も多くの人が観光に詰めかけるのは木落とし坂¹⁰⁾である¹¹⁾。その後両社の御柱は里引き、建て御柱の工程に入る。上社では里引きが始まるまで御柱は御柱屋敷に安置され、その間に役目の終わった古い御柱を倒すお休め祭がある。里引きでは、御柱迎えの行列が組まれ、御柱迎えのお舟が上社まで柱を先導する。里引きが終了し、各御柱がそれぞれの場所につくと、御柱の先

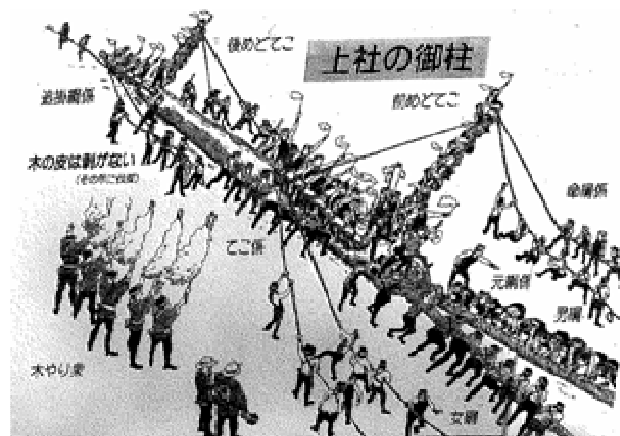


図3 上社と下社の御柱

(男綱・女綱および装飾の違い) (出典：『おんばしら』)

端を三角錐に切り落とす、冠落としが行われる。その後建て御柱が行われ、この後に新しい宝殿が建てられる。上社では最終的に6月15日、新しい宝殿に神霊を奉遷することによって御柱祭が終わりを告げる。一方下社では、シメ掛けまで曳行された御柱は注連祭¹²⁾によって山出しが終了となり、この約1カ月後に里引きが行われる。里引き初日には、春宮から秋宮へ御柱迎えの

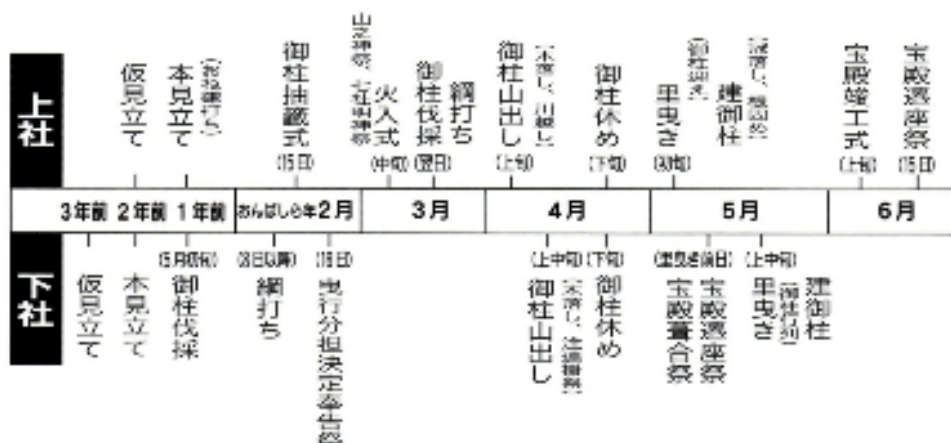


図2 上社と下社の御柱祭の流れ

(出典：信州市民新聞グループ『おんばしら諏訪大社御柱祭のすべて改訂版』)

行列が向かう行事が行われる。この時期に街中で繰り広げられる、江戸時代の御柱の護衛をした様子を再現するような騎馬行列や長持ち、女性中心に行われる花笠踊りなどの華やかな行列は下社特有のものである。下社では、新しい宝殿が里引き直前に完成し、それを祝う葺合祭が行われる点が、上社と異なる。

第4に、御柱の装飾に関する違いである。御柱の先端にメドデコという角がつくことは上社特有である¹³⁾。一方下社特有のものとしては大御幣¹⁴⁾が挙げられる。また、御柱の先頭につけられる曳き綱の名称は上社と下社で逆になっている¹⁵⁾。左右において、左側の方が神様に先に仕える・優先であることを示すので、男綱が柱の側から見て左にくることから、上社では柱に乗った状態、下社では御柱に向かった状態を想定して男綱・女綱の名付けが行われたことがうかがえる。

3. 御柱祭の変容

御柱祭は時代が変わるとともに、方法とその内容が変化している。江戸時代後期に描かれた「御柱絵巻」によると、昔の御柱祭では現在と違って柱の上に人が乗らなかった¹⁶⁾。また、昔は木落としもなく、建て御柱も人力で行っていた。さらに、以前は女性が御柱の先頭に乗る、華乗りの役割をすることはなかったが、最近ではラッパ隊や木遣り、また曳行に参加する女性も増えてきた¹⁷⁾。

御柱祭の曳行分担の決定方法の上社・下社での違いには歴史的な原因がある。江戸時代、曳行の分担は、各村の人数にあわせて藩が決めていたが、明治時代になって江戸時代のを基準として柱の分担を決め直した。しかし、太い柱を曳きたがる人が多く、明治23年、上下両社で抽籤会が行われたのである。上社ではそれ以来抽籤会が行われるようになり、下社では山出しと里曳きで曳く柱を変えて、平等にするという方法がとられるようになった¹⁸⁾。

また、御柱の切り出し場所の変遷にも歴史的な背景がある。上社は神社の所有する山があったため、そこから切り出していたが、下社では神社所有の山がなかったのであちこちの山から木を切り出していた。これに関しては記録が残っている。幕末には適当な木が近くの山になくなってしまい、明治22年以降は東俣の御料林(現在の国有林)から切り出すことになった。山からシメ掛け(棚木場)という場所まで木を持ってくることが現在の山出しであるが、昔は一つの行事であり、祭りの一部ではなかった。シメ掛けから神社まで曳いてきて柱を建てるのがかつての御柱祭だった。

切り出す山が確定したことで、明治の終わりのころ御柱を曳いてくるルートも確定した。現在のような山出し・里曳きの形ができたのは明治の終わってから大正のはじめごろである。決定したルートには、細くてカーブのきつい道があり、御柱を通せなかったため、その手前の坂で柱を落とし、シメ掛けへ続く道に入れることにした。下社の場合、木落としが行われるようになったのは、そのようにせざるを得ない理由があったためである。

御柱祭の近年の変化という点では、祭りがイベント的になり、セレモニーや垂れ幕など、全体が派手になったことがある。服装も、昔は股引きに腹かけ、足直袋で祭りを行っていたが、今では作業服がユニフォームになっている。また、メドデコに派手な飾りをつけるようになった。上社に見られるメドデコは、もともとはなかったものと考えられている。メドデコがつけられた背景については前節で述べた通りである。このように、御柱祭は昔より現在のほうが派手になっているが、それに応じて安全の意識も高まっており、特に下社の木落としの際の安全配備も進んだ。観光客の立ち入り禁止区域を厳密に定めるなどの規定もある。昔は「御柱祭で死ねたら」という意識もあったようだが、今では安全が重視されている¹⁹⁾。

V 御柱祭に対する住民意識の多様性

御柱祭は地域住民にも広く意識された祭りであり、かつては御柱祭の行われる前年には家の新築、増築や結婚を控えるなどといったことも行われた。そのような習慣は現在でこそ薄れたものの、今日でも7年というサイクルを節目に感じて生活している人は多い。人々の生活に御柱祭がいかに影響しているかわかる。本章では、御柱祭と住民について、インタビュー調査での住民の声を中心に考察していきたい。

1. 新しい人と昔からいる人の間にある意識の差異

諏訪地域には、先祖代々住んでいるという人もいれば、新しく入ってきた人たちもいる。昔から住んでいる人にとっては御柱祭は身近なものであり、御柱祭を人生のサイクルに重ね合わせている人さえいるが、新しく諏訪に入ってきた人々にとっては、御柱祭とはどんなものなのだろうか。また、そのような新しい人々に対して、昔から住んでいた人々はどのような思いを抱いているのであろうか。

御柱祭において新たに入ってきた住民に対しては、各地区で対応が異なるようである。下社の祭に参加する地域での例を挙

げると、下社ではどの御柱を曳くかの担当があらかじめ決まっており、太い柱を曳く地区ではそれだけ柱周りの役職が重視されているため、新しく入ってきた人がすぐに重要な役目につけるわけではない。下社は抽選を行わないため柱に上社ほど強い執着心を示さず、観光客などの祭の参加²⁰⁾には寛容ということだが²¹⁾、それでも最も重要な役割²²⁾は昔から諏訪に住んでいて、皆に信頼されている人が担う。

諏訪に新しく入ってきたが御柱祭には参加したくないという住民もいるかもしれないが、御柱祭への参加は基本的に強制されていないようである。

街頭でのインタビューにおいては、更に具体的な住民の意識を聞くことができた。ずっと諏訪に住んでいる人の話では、「古くから諏訪にいた人と、新しく来た人や御柱祭に批判的な人との間には、やはり何らかの溝がある」(40代男性・上諏訪いきいき元気館にて)ということが聞かれた。一方、「ここ(諏訪)にずっと住んでいる訳ではないので、お祭りへの参加の仕方が生まれた時からずっと住んでいる人とは違う」ということも、インタビューにおいてたびたび聞かれた。「御柱祭には詳しくない。東京に働きに出ていた時期があるので、御柱祭には参加できるが、御柱に乗ることはできない」(70代男性・下社秋宮近くにて)、「30代から紡績会社に入社して御柱に関わるように。現在は伐採にも立ち会う(ほど、御柱祭に深く関われるようになった)が…(中略)…30代から入ってきたので知らないこともある。昔からの人とは違う」(60～70代男性・下諏訪の商店街にて)といった声である。また、華乗りという特殊な役割については、「地元の消防団²³⁾に入っていて、そこで地域への貢献をたくさんしている人が選ばれる」、「とび職のように特殊な技術を持っていてさらに消防団に所属していると選ばれる」(40代男性・上諏訪いきいき元気館にて)というように、地域への貢献度が注目されているといった発言が聞かれた。このように、御柱祭への参加の度合いと、今までの居住実績やそれに伴う祭りや地域への貢献度が強く結び付いていると言える。

2. コミュニティ形成と御柱祭

以下では、諏訪でインタビューした内容をもとに、御柱祭と諏訪のコミュニティの関係についてみていきたい。

各人の話の前に、諏訪とはそもそものような地域なのか、基本的なことに触れておこう。諏訪は、その地理的条件や気候から耕作地には恵まれず、さらに農作業のできる期間も短かった。そのため、古くから農閑余業としての副業が発達した。中

山道、甲州街道、三州街道の合流地点でもあり、温泉も豊富に湧いたことから、宿場町としての機能も果たしてきた。

・諏訪湖博物館・赤彦記念館館長の話

諏訪では、土地の移動、人の移動が激しく、この「移動」がコミュニティ形成の一角を担ったといえる。

また、下諏訪宿は昔から宿場町として栄えてきた土地であるが、ここでもやはり人の移動が鍵になっている。移動の激しさによってコミュニティがより活性化するからだ。そのため、下諏訪宿は外部に対して開放的であった。しかし同時に、宿場根性ともいべき排他的な側面があったことも否めない。以前から住む人と新しく来た人との間には埋めきれない溝があったというのもまた事実である。

また、平成の大合併の流れで諏訪にも市町村合併の話が何度も持ち上がっている。しかし、この件がうまくいったことはない。それぞれの市町村が一体となるときは唯一御柱祭のときのみのである。つまり、御柱祭こそが諏訪の統一原理といえるのであり、また祭りの背景にある諏訪大社が衰退すればそれはすなわち諏訪地域全体の衰退へとつながってゆくといえるのである²⁴⁾。

次に示すのは、今回の調査最終日に行った住民の方々への聞き取りの、それぞれの内容である。カッコ内はそれぞれの人に聞き取りを行った場所であり、いきいき元気館での聞き取りに応じてくださった方は上諏訪、それ以外の場所で応じてくださった方は下諏訪の御柱祭の地域に住んでいらっしゃる。

・30代男性(いきいき元気館)

諏訪内の地区には、ボランティアで結成される消防団がある。この組織には御柱祭につながる別の一面もある。御柱祭の見どころの一つ、木落としの際に柱の上に乗る華乗りという役目の人がいるが、この花形に選出されるには消防団に入り、そこで上の世代の人に努力、活躍を認めてもらうことが条件の一つだという。この組織は縦のつながりが強く、諏訪のコミュニティ形成にも少なからず影響力を持っているようである。

・70代女性(下諏訪駅周辺)

御柱祭は男性を中心に役員が回ってくる。小宮の祭りは自分たちの地域で行い…。

・70代男性(下社秋宮)

御柱祭の役員には若い人もいて、育てる場にもなっている。地域づくり、まとまりにも役立っている。なお、役員に選ばれ

る人は社会的にも地域の人にも注目され、認められていなければならない。

・ 70代男性（下諏訪町）

現在では若い人々が団体を作って長持ちの保存会を結成している。青年団がないため、この会が大きな役割を果たしている。この会がなければみんなはバラバラである。

宿場町の例に代表されるように、諏訪は新しいものを求めつつもどこかで一線を引いてしまうという地域性があるようである。また、小さなコミュニティでは団結することが多く、それに対する住民の努力が払われていたとしても、それぞれのコミュニティがさらに大きなものとしてまとまることはなかなか難しいようだ。

上社、下社というまとまりで見ても異なるということがわかる。上社の領域では一本の御柱を担当する地区ごとに団結が強くなり、下社では御柱実行委員会を中心に全体でまとまる傾向がある。このまとまりは御柱祭のときだけでなく普段の生活上でも意識されることであり、地域ごとの小宮祭などでもコミュニティが継続する。

さらに、御柱祭のサイクルが7年に一度であることもコミュニティの継続に関与しているようで、ちょうど世代が変わるときに新たな御柱年がやってくることで、若い人への引き継ぎがしっかりでき、縦のつながりをそこで再確認することができる。また、御柱祭での木遣りに子供が参加していたり、地域ごとの小宮祭において子供が主役になって小さい御柱を曳いたりなどと、幼いころから御柱祭に対する意識づけがされる場が多く、諏訪に根付く祭りを中心に縦、横ともにつながりを求める場が確立されているといえる。

諏訪と御柱祭。御柱祭にむける住民の団結と、そこで生まれたつながりの生活への影響。住民たちは御柱祭にむけて大小さまざまなコミュニティを形成し、それを継続させてゆくことで、地域の絆を深めている。御柱祭とコミュニティの生活環境は、それらの相互関係だけにとどまっているのではなく、住民の意識の中心として機能しながら、他の様々な要素もまきこんで「諏訪」という地域を作り出しているのである。

3. 住民の意識の中心としての御柱祭とその影響

ここまで見てきたように、「諏訪」という地域を作り出しているのも、そしてその地域に住む人々の間の結びつきやコミュニティ形成に大きな役割を果たしているのも御柱祭なのである。

そのような御柱祭であるが、第2章でも述べたように、御柱祭と一言で言ってもそこには上社と下社による違いが存在する。インタビューや聞き取りを進める中で、御柱祭がコミュニティ形成と結びついているという事実が、住民の意識において、「上社」「下社」地域の無意識のうちの比較となって現れていた²⁶⁾。ここではその点を指摘しておきたい。

それは、御柱祭が近年豪奢なものとなってきていることに関しての語りや、御柱祭についての語りの中で見られた。「綺麗になりすぎているのは上社のメドデコ。見せようという気概が強い」といった下社秋宮周辺での70代男の語り、下諏訪での聞き取り調査で聞かれた「上社は衣装が派手。上社は特にひどい。」という語り、その一方で「近年の御柱は派手になっている。しかし、地区によっては昔の御柱を取り戻そうという動きがある。」という話が上諏訪での聞き取り調査では聞かれたのである。

このように、近年の御柱祭の変化について、下諏訪では「上社のものは派手だ」という話が聞かれるのに対し、上諏訪では上社のお祭りの中でも本来の質素さを取り戻そうという動きがあるという話が聞かれた。このように、同じ上社の御柱祭を語る際に、自分が身を置く地域によって意見に相違がみられたのである。これらだけからでは結論づけられないが、ここには上社・下社というくくりが、そして自分がどちらに位置しているのかということが意識に影響を与えていることが伺える。

また、「地域性」に関する語りの中では、上社地域と下社地域では地域性が異なるという話が聞かれた。以下に挙げるのは、そのことを行政の側面から語ったものである。「上社は茅野市と諏訪市に行政区が分かれるので地域のまとまりが強い。下社は下諏訪という行政区が1つなので実行委員会がつくりやすい（統率がとりやすい）。（諏訪湖博物館・赤彦記念館館長の話）」。このことはコミュニティの節でも述べたが、ある意味「上諏訪の特性」「下諏訪の特性」が、上社・下社の御柱祭を通じて形成されているようである。

今回は、この点について論じる十分な調査ができたとは言えず、課題はある。しかしながら、上記のように、人々の意識の中に、上社地域と下社地域で分けて考え、この2つの間に地域的な差をみる意識が垣間見えた、ということは指摘しておく。

VI 御柱祭の近年の変化と住民

1. 諏訪人氣質の視点から

近年の御柱祭はだんだん派手になってきている。上社で言えばメドデコが長くなって飾り付けが派手になり、建て御柱の際

のセレモニーや垂れ幕が登場した、などである。これらは御柱祭がだんだんとメディアに取り上げられるようになってから顕著になってきたそうだが、年々派手になる御柱には、諏訪の人々の気質が関係しているかもしれない。御柱祭がイベント的なことについて、上諏訪で行ったインタビューでは、30代男性が「昔と比べて派手になっている、メドデコなど、戦後どんどん長くなっていると聞く」と述べていた。

一般的に諏訪人氣質とは、勤勉である、わが道を行く、などと言われるが、現地の人に諏訪人氣質について尋ねてみたところ、新しいもの好き、一方で古いものにはあまり興味がないという特徴も聞かれた。この新しいもの好きの気質が手伝って、御柱祭は年々新しい形をとってきているのかもしれない。また、現在では薄れてきているが他人に頼らず自分の責任を自分で負うとする気風があるようである。「怪我は自分持ち」という精神のもと、例えば御柱祭で怪我をしても諏訪外の病院へ行って怪我を隠したり、死んでしまった場合すらも御柱で怪我しなくなったとは言わないそうだ²⁹⁾。御柱祭に関しては、神様に奉仕するため怪我はタブーであるという意識が背景にあるようだが、普段から自分が怪我して誰かに愚痴を言うとは逆にバカにされるという風習があるという。そのような意識があったからこそ、多くの負傷者を出しても御柱祭が継続してきたと言えるかもしれない。

2. 観光の視点から

御柱祭が派手になってきていると言われる一方で、ごく最近、逆の動きも出てきているようである。つまり、見た目のきらびやかさを誇張するのではなく厳かな神事として昔のようにシンプルに祭りをを行う方法である²⁷⁾。なぜこのような2つの方向への変化が起こっているのであろうか。

そこには「観光」というものが大きな影響を与えていると考えられる。上諏訪市役所の企画調整課課長さんが「(御柱祭は)観光客数の上下を握っているお祭り」と述べているように、平年では観光客数は600万~700万人だが、御柱の年は観光客数が増大し、御柱祭は諏訪の観光の目玉、観光資源という点からも諏訪地域にとって重要なものなのである。御柱祭が注目されるようになったのはここ20数年のことであり、昭和61年頃からは少しずつ、そして平成4年には盛んにメディアで取り上げられるようになった²⁸⁾。これに伴い、観光資源としての御柱祭の役割に目が向けられ、良い意味でも悪い意味でも「観光」が強い影響を与えるようになったのである。

下社周辺の住民の方のインタビューでは、70代男性が御柱祭の観光化について「戦後は観光的になってきている…前回(2010年)観光客が多すぎて綱が引けず…」また「神事のニュアンス・奉仕の意味が低くなり、レクリエーションの一つになっている…そして見せようという気概が強いことは御柱祭が観光的なものになることによりもたらすデメリットだ」と述べていた。ここから分かるように、御柱祭という神事が一種の「イベント」「レクリエーション」として眼差されるようになり、外部からその「非日常」のイベントに参加しよう、見ようという人々が押し寄せるようになったのである²⁹⁾。そしてこれに伴い、御柱祭はだんだんと豪華なものになり、メドデコの飾りや法被・さらには祭り自体が華やかになってきたのだ。

一方の御柱祭を元の姿に戻そうという動きも、このような「観光化」の流れから出てきている。次第に華やかなものへと変化していくなかで、そのことに疑問を抱く人々が出てきたのである。「御柱祭…神社の行う神事が拡大したもの。1200年以上続いてきた伝統だけで十分。伝統が注目されている祭りだから、はでにする必要がないと考えている³⁰⁾」という語りができるように、御柱祭の持つ「伝統」という点に着目し、そこに祭りの意義を置くようになったのである。

このように祭りが豪華なものへなったのも逆に以前の形に戻そうとしていることも、観光が関わっていることは間違いなく、御柱が今や諏訪地域内だけで完結する祭りではないことが伺えるのである。そしてこの「観光化」の流れは人々の意識にも影響を与えており、御柱祭の起源や正確な目的などの勉強に興味を持つ人が増えてきたという変化もあるようだ。特に下諏訪の中では、御柱のことを勉強する意識が広がってきている。今の御柱祭は観光資源として見られている面が強いため、「観光客から祭りのことを聞かれた際に情けなくないように³¹⁾」というのが動機になっているようである。実際にインタビューをさせていただいた方が多くが、最初は「自分は詳しくないから。」とおっしゃるものの、諏訪大社のことや御柱祭について、非常に分かりやすく説明して下さった。観光客をいかにおもてなしするか、ということは経済効果の面からも着目されている³²⁾。

諏訪地域の人々の生活に深く結びついている御柱祭は変容し続けている。そして近年の御柱祭に大きな変化を与えているのが、観光化による外部の「まなざし」なのである。

Ⅶ おわりに~今回の調査を終えて~

今回私たちのグループは「御柱祭」というテーマをもとに調

査を行い、いかに御柱祭が諏訪地域の文化的・生活的中心となっているかということを本論で述べてきた。これらは主に諏訪地域での聞き取り調査およびインタビュー調査から得られた成果であり、実際に「諏訪」という地域に自身の身を置いてみなければ分からなかったことである。そして、諏訪の地域で今回出会った人々の存在なしには書けなかったものである。最後に、このフィールドワークで出会い、未熟な面も多くある私たちに貴重なお時間を割いてくださった方々に感謝し、本論の締めくくりとしたい。

文責：

佐伯 (4-2,5-1,7)

中嶋 (3,4-1,5-2,7)

小川 (4-1,4-2,5-3,6-2,7)

趙 (3,4-3,6-1,7)

注

¹⁾ 詳細は次ページ図1参照

²⁾ 『諏訪大明神絵詞』より。

³⁾ 『おんばしら』 pp.116～119。

⁴⁾ 御造営祭が古くから行われてきたが、次第に技術が高くなり壊すのが惜しいほど立派な社殿が造られるようになった。そのような変化を受けて、7年目ごとの造営が宝殿だけとなると同時に社殿を造営する代わりに4本の御柱を建て替えるようになったというのである。

⁵⁾ 諏訪湖博物館・赤彦記念館館長の話。

⁶⁾ 実行委員会を中心にする事で、「統率がとりやすく、情報を伝えやすい。」(諏訪湖博物館・赤彦記念館館長の話)

⁷⁾ 上社も最近では変化してきている。

⁸⁾ 地区割りがあらかじめ決められ、担当する柱も決まっている。そのため、5月に行われる伐採は柱を担当する地区ごとに自分の担当の柱を伐採する。

⁹⁾ 山出し後に、曳いてきた御柱を一旦休ませる地点。

¹⁰⁾ 最大斜度 35 度全長約 85 メートル。

¹¹⁾ 蟹江文吉氏の話。下社の御柱を見た人は、上社の御柱はあつけないと言う、という指摘があるほどだ。

¹²⁾ 白樺の木を四隅に立て、悪霊が入り込まないようにシメ縄をはるもの。

¹³⁾ メドデコ・曳き綱の名称については図3を参照。メドデコの由来は諸説あるが、上社では御柱を曳く道が土壌の質によりぬかるんでいたため、メドデコをつけることで柱を左右に振りながら進んだ、などと言われている。

¹⁴⁾ 図3参照。

¹⁵⁾ 図3参照。

¹⁶⁾ 初めて人が乗ったのは大正3年と言われている。

¹⁷⁾ 女性と御柱に関しては、下諏訪駅周辺でのインタビューでも「小宮のお祭りの方が女性のお祭りという感じがする」という話が聞かれたように、御柱祭の本祭の方は、男性が中心のお祭りであることが伺える。

¹⁸⁾ 蟹江氏の話。下社の地域では、製糸業が盛んであるため、仕事の妨げになることを嫌うこと、太い柱を避けるような風潮があり、そのため担当を決めてしまったのだという指摘もある。一方上社は「百姓どこ」(農業を中心とした地域)であるため、そのようなことがなかったというのである。

¹⁹⁾ 諏訪湖博物館・赤彦記念館館長の話より。「怪我は自分持ち」という気風が諏訪にはある(詳しくはVI-1.を参照)。また、いきいき元氣館での女性たちからは、御柱は危険なもの・死んでも何の保証もないと言う話が聞かれた、これは過去の体制も含めての話と考えられる。

²⁰⁾ 柱の周りの綱と一緒に曳いたり、一時的に観光客を柱の上に乗せて写真を撮ることもしているようだ。

²¹⁾ 諏訪湖博物館・赤彦記念館館長の話。

²²⁾ 常に柱周りを管理する役職や、華乗りなど。

²³⁾ 詳しくはV-2.を参照。

²⁴⁾ 諏訪市博物館での話。地区内の結束が強くなったことで、江戸時代には一揆が少なかったという話も。

²⁵⁾ 氏子の帰属意識が御柱祭で上社と下社どちらの神社に参加するかによってはっきり分かれるという指摘は、信濃毎日新聞社グループ 2003『諏訪人と風土』で見られる。

²⁶⁾ 諏訪湖博物館・赤彦記念館館長の話より。

²⁷⁾ 諏訪湖博物館・赤彦記念館館長の話より。

²⁸⁾ 諏訪湖博物館・赤彦記念館館長の話によると「昭和51年の(下諏訪に)戻ってきての初めての御柱の時には、よそから来るお客さんは今よりも少なく、落ちる1時間前に行っても見られた。」現在は、木落とし当日の日は、大勢の出入りがあり坂に近づけなく、坂の近くに入れ替え式の席が設けられるなど、その様相は大きく変化している。

²⁹⁾ 諏訪市博物館での話。「観光については、観光客は完全に御柱祭を他人事として見ている印象。木落としを見ると、地元の人は「痛そう」と心配するが観光客は笑う。傍から見ると面白い。」

³⁰⁾ 諏訪湖博物館・赤彦記念館館長の話より。

³¹⁾ 諏訪湖博物館・赤彦記念館館長の話より。

³²⁾ 寺沢「諏訪大社御柱祭の経済波及効果は215億円」HPより

文献

大塚昌利「諏訪地方における「御柱祭」から見た地域社会の重層性」『立
正大学人文科学研究所年報』別冊 11, pp. 30-48 1997

清川理一郎『諏訪神社 謎の古代史—隠された神々の源流』彩流社 1995

信濃毎日新聞社編『諏訪 人と風土』信濃毎日新聞社 2003

信州市民新聞グループ編『おんばしら 諏訪大社御柱祭のすべて 改訂版』
信州市民新聞グループ2009

諏訪地方観光連盟御柱祭情報センター,『信州諏訪御柱祭 七年目毎の天
下の大祭』2009

諏訪大社『諏訪大社由緒略誌』

諏訪市史編纂委員会『諏訪市史 上巻 原始・古代・中世』諏訪市 1995

諏訪市史編纂委員会『諏訪市史 中巻 近世』諏訪市 1988

諏訪市史編纂委員会『諏訪市史 下巻 近現代』諏訪市 1976

平成22年度国勢調査

寺沢直樹「諏訪大社御柱祭の経済波及効果は215億円」長野経済研究所HP
研究コラム

[http://www.neri.or.jp/view.rbz?nd=67&of=1&ik=1&pnp=16&pnp=20&p
np=25&pnp=67&cd=867](http://www.neri.or.jp/view.rbz?nd=67&of=1&ik=1&pnp=16&pnp=20&pnp=25&pnp=67&cd=867) 最終閲覧日 2012/12/06